七英雄物語

七英雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
七英雄物語

【Ｎコード】
Ｎ７８０５Ａ

【作者名】
七英雄

【あらすじ】
異世界バロゲニアガルドを舞台に繰り広げる７人の英雄達の戦いを、壮大なスケールで展開させる超大長編。一週間毎の更新をしています。

異世界バロゲニアガルド

世界は混沌の闇に押しつぶされる寸前であった。
その闇は絶望の神と恐れられ、とてつもない力を持って何もかもを忘却の彼方へと葬り去るべく世界中を覆った。
未知なる人の形ではない怪物の出現。絶望と悲鳴が各地に響く。
人々は叶わぬ思いを感じつつも、それでも期待して神に祈った。
願い通じず、殺戮は続き、絶滅の最終宣告を受けるだけかと覚悟した。

いつの間にか空は眩いばかりの光を地上に照らしていた。それは人々が望んだ希望の光。
大地に平和の風が世界中に吹き込んだ。それは人々が望んだ安らぎの風。
光は力強く、風は穏やかに心地よく、森の香りを漂わせながら、圧倒的な黒き闇を消し去っていく。
太陽の神が降り立ったのだ。

消えてしまった数々の途方もない力は呪いの言葉を発しながら暗い地底奥底へ沈んでいった。
絶望の神メンデルゴスは、太陽の神アルニヴァースの力により封印された。世界に安息の日々が訪れ、太陽の神もまた天へ永遠なる眠りに戻っていった。

時が過ぎ、太陽神アルニヴァースがもたらした平和はただの伝説だけになってしまった。

世界バロゲニアガルドは争いの絶えることないことが当たり前の世の中に成り下がっていた。
どの国も自分達の利益のみを追求し、謀略、侵略の繰り返しで、人間達こそが、絶望神メンデルゴスの化身ではないかと思う程であった。

絶望神と太陽神の戦い終結から１６００年後。

ガルド暦６７９年。
バロゲニアガルドに２つの強国が生まれた。同じ太陽神を信仰しながら剣の国アーガスと魔法の国ニゴラス。
も、剣と魔法という違うものを扱う国は、いかにして魔法を剣に、剣を魔法にとお互いがお互いをわが国の配下におくことだけを考えているため、表向きの付き合いはあるものの、緊迫した雰囲気が常に両国へと伝わっていた。

自国だけならまだしも、国の中でも問題はあった。
異教徒、内紛、暗殺。２つの国も避けては通れない事柄だった。とくに異教徒の問題は深刻を深めた。
異教徒とはつまり、絶望神を崇める人々。アーガスの異教徒、ニゴラスの異教徒が手を組み、新たな国家を作った。

ガルド暦７０３年。
異教徒の国ロクシーヌの誕生である。
魔法と剣が協力し合うことになるこの国は小さいながらも絶大な戦闘力を誇り、攻め込んだアーガスやニゴラスの軍を何度も退けた。

ロクシーヌ国は絶対に他国には敗北しないだけの自信があった。

この3大国を中心に歴史は進んでいく。それはただの殺し合いの歴史。何も実りがない歴史。

ガルド暦870年。

世界は8つの国となり、それぞれの指導者が統一していた。

同時に地底奥深く暗黒の淵から、虎視眈々と地上を狙っている不吉な存在がいた。絶望という名の神、メンデルゴス。

黒い足音はコツコツと地上へ近づいていく。

何も気づかず人々は平和な人生を送っている。

やがて気づくのだろうか。絶望神の姿を見て初めて自分たちの愚かさを。

そして祈るのだろうか。現われるはずもない太陽神を。

いや、それでも人々は希望するのであろう。

いつか天から降臨せし、救世主の出現を。

第1部　遥か遠き孤島の叫び　プロローグ　黒衣の者

剣の国アーガス内を北に進むと大きな名もない森がある。
衣を頭まで身に纏ったその者は、フラフラと足元に余裕のない歩き方をしていた。他人が見れば酔っ払いとでも思うだろう。
その者は彷徨っていた。自分がどこを歩いているのかわからない。
今にも倒れそうな弱々しい姿を、森をアジトにしている賊が見過ごすはずはなく、あっという間に黒衣の者は数十人の賊に囲まれた。
アーガスに住む男達の最終目標は国公認の戦士になることだった。戦士になることが最上級の喜びであり、誇りであり、家族への希望なのだ。
しかし、全員が戦士になれるわけではない。生まれながらの才能。寝る時間を惜しむほどの鍛錬。強靭な意志。全てが揃わないと、戦士にはなれないのだ。
当然、その厳しい審査に脱落する者もいる。そんな彼らは、商売を営むもの、雑用として働くもの、落ちぶれるもの。今この場にいる賊達もまた脱落した男達の末路なのだ。
黒衣の者の足は止まらず、まるで賊の存在などなかったかのように、通り過ぎた。
賊の一人が「おい、待ちな」肩を掴んだ。同時にほんの一瞬だけ触れた肩が光った。思わず目を閉じた賊は、ゆっくりと目を開けながら、手の感覚がないことを感じた。
他の賊達の呻き声が聞こえた。本人にも何が起こってるのか理解できなかったが、自分の腕が消え去っていることを見て叫び声を上げた。
「この野朗！」と傍にいたもう一人が剣を振りかざした。
腐っても戦士を目指していた男達である。腕前も人並み以上なのは間違いない。
だが、またしても一瞬の光で、剣を振りかざした賊の下半身がそ

の場に崩れ落ちた。今度は上半身が消え去ったのだ。黒衣の者は何も武器を持っていないのに。
何人かの動きが止まった。それを素早く察知し、このままではいけないと、親分格の男は自ら襲いかかった。・・が、結果は同じであった。
残りの賊は恐れをなして、全員逃げるように離れていった。
黒衣の者は、そんな様子すらも気づかずに、ゆっくりと、足を前へと進めていった。
その場に残った2つの死体を後にして。

第1部　第1章　白髪の男　その1

孤独の島ゲルニア。世界8国の中で、最も小さい国として知られる。島を国としている所は他にバリュアス、ドルゴルドの2国があり、本島の国々との外交関係を築いている中、ゲルニアだけが置き去りにされているかのような扱いを受けている。
それは、ゲルニア国が望んでいる形ではなかったが、島の位置関係のせいでもある。北の最果てに位置するこの国は極寒の島で、滅多に本島の者が島へ来るということがないのが理由の一つで、逆に島からわざわざ本島へ行く者もいない。外交はもちろんのこと、移動するのにも一苦労なのだ。
理由はそれだけではなかったが、主としては島から出ることが出来ない寒さの環境のせいである。そのため「不出の島」と呼ばれている。
5年に1度行う世界8国の代表全てが集る会議、「世界ガルド会議」が唯一情報交換できる場となっていた。丁度今年はその会議が行われる年である。
そんな孤独の島にある国なのだから、外から異国の者が突然来ると、物珍しさと、怯え、戸惑い、恐怖、警戒で全土に緊張が走る。そこには歓迎という言葉はない。それほど異国の者が来るということは重大なことなのだ。

ガルド暦910年。
遠き他国では春の訪れと共に暖かい風を感じ始めている頃であるが、ここゲルニアでは気温は多少上がってはいても、実際は1年中凍えるような寒さを耐えねばならない。
世界ガルド会議があと数ヵ月後だが、人々は変わらずいつも通りの生活を続けていた。

島の外れにあるグロン村。
７歳のボズは母親に頼まれて、ガイという魚を捕りに、作ったばかりの防寒服で身体を包み、海へ向かっていた。
極寒のこの地でガイという魚は栄養もあり、どんな味付けにでも対応できる便利な生き物で、ゲルニア国民の主食となっていた。
動きも遅く、やり方さえ覚えてれば誰にでも捕ることが出来る、実に都合のいい魚であった。
国が今まで維持できたのは、このガイのおかげでもある。従って、賢い者はガイの養殖を商売としている者もいた。
ボズにとって、ガイ捕りはいつもの日課で、ごく当たり前の仕事であった。村の子供達はまずガイ捕りから覚えていく。
去年から始めたガイ捕り。ボズは１年の経験で、自分なりに絶好の場所を見つけていた。複数の家族が食べていけるだけのガイがその場所にはあった。
友達のコウミは必要以上に捕ることで、皆からの不満を買っていた。この前は２０匹捕ったと自慢されて悔しかったことをボズは思い出した。
張り合うわけではないが、コウミよりも捕るのが下手だと思われるが嫌だった。今日は親に怒られても３０匹を目標に捕ることを心に誓った。

目的の場所に辿り着いた時、見慣れたいつもの景色に別の物体が混ざっているのを悟った。
何百回も見た景色である。今まで何も変わることのなかった場所。明らかに何かが見える。ボズの目にはそれは人に見えた。
人がこの島に流されてくることなど前代未聞だ。ボズは大人を呼ぶことよりも真っ先にどんな人間が流されてきたのかという好奇心が頭に浮かんだ。ガイ捕りどころではない。
恐る恐る近づいていく。近づくにつれ、その人間の姿がはっきり

と見てきた。
うつ伏せの状態で岩に引っかかっている。身体つきを見るからして、間違いなく男だとボズは判断した。
目的地は元々この島だったのか、防寒服は着込んでいたが、簡単に思っていたのだろう、他では通用する防寒服も、ここではまだまだ薄い部類に入る。
ボズの中に少し疑問が芽生えた。最初の判断では男の身体は服の下に隠れているとはいえ、若々しい肉体に見えたのが、実際近づいてみると肩まであるその長い髪の色は白かった。こんな身体をした老人がいるのかとボズは動揺した。
なぜ、こんな所に流れ着いたのだろうか、ボズは辺りを見回したが、船などの残骸は見えなかった。
近づいたはいいが、一人ではとても動かすことが出来ないことに今頃気づいて、ボズは慌てて村へと引き返していった。

グロン村は騒然となった。
それもそのはずである。島に誰かが流されたということ自体今までなかったことだし、更に薄い防寒服を着ていたことで、ゲルニア国の者ではないという事実も判明した。
ボズの報告を聞き、まずは見て判断することになった。こんな島のこんな村とはいえ、緊急事態が起きた時のためではあるが、武器を用意している。
数人の大人達は武器を手に取り、海へ向かった。同時に国王へ知らせねばと一人が伝令に走った。
ボズも道案内としてついていくことになった。友達のコウミがボズの背中を突付く。後ろを振り返るとコウミの他に村の子供達が何人かいた。
「お前本当に見たのかよ」
コウミが疑わしく言った。

「何だよ、俺が嘘ついているといいたいのか」
ボズはムッとして言い返した。
「だって、こんな所にだぜ。しかも、船の残骸とかないんだろ。じゃあどうしてここに流れ着くんだ」
「知るかよ、そんなこと」
コウミは嫉妬しているのだとボズは思った。きっと自分が発見者なら嬉々として自慢するのだろう。
「おい、ボズ、早くしろ」
大人の呼び声にボズは大きな声で返事をし、コウミ達をその場に残して、海へ案内した。

海へ着いた大人達は、武器が全く必要ないことを認識した。その白髪の男はまさに虫の息だったのである。襲い掛かるなどできるわけがない。
普段が争いを好まない民のせいか、こんなにも弱っているなら、なんとか助けようという気持ちが全員に伝染し、大人達は白髪の男を村へ運ぼうと皆で協力し始めた。
男が抱き起こされた時、ボズは驚いた。老人だと思っていたその顔は立派な青年の顔立ちだったのだ。
村にもいる若い男と同じであった。よく見れば、その白い髪も透けるように美しく、若々しかった。
こういう人種が遠い大陸にいるのだと、ボズは自分を勝手に納得させた。

つづく。

第1部　第1章　白髪の男　その2

ゲルニア国、ティファレン城。

島の中心に堂々と建っているこの城は、他国と比べると決して大きい城ではない。戦争に無頓着というわけではないが、その争いに巻き込まれることがないのだ。

従って、大きな城を建築し、戦争に備えるということはない。備えるべきはこの寒さだけである。

城内の王の間へと続く廊下。スライ将軍は、そんな国の考え方に疑問を感じていた。戦争に備えることがないということは、兵も、将軍という地位の自分自身も必要ないということだ。万が一というだけで存在している軍などなくてもよいのではと思っている。

同僚のファミリストン将軍には、この気持ちを打ち明けているが、ファミリストンは「何事もないことが一番良いではないか」と笑って済ます。

スライも心の奥底ではわかろうとしているのだが、やはり存在価値のことを考えると今の現状に対して不満があるのは事実だ。いっそのこと国をもう少し本島の近くにでも移動出来るのであれば、もっと刺激のある毎日を遅れたのかもしれない。

スライは自分の物騒な考えに対して頭を振り、王の間へと足を進めた。

ゲルニア国は、セラミス王と宰相のハミルを中心として動いており、その国を守るべき将軍が2人いる。

スライ将軍とファミリストン将軍である。

親も元将軍であり、2人の将来への道は既に決まっていた。王のために、国のために、子供の頃から英才教育をしてきた2人はよき友であり、よきライバルであった。

自分の感情を抑えすぎているせいか、苛立ち部下にも叱咤してしまうスライに対して、ファミリストンはどんなことがあっても、極めて冷静に対処をする。
合わないという周りの意見に反して思いのほか2人は仲が良かった。
「将軍、グロン村からの伝令です」
兵士の一人が城下町の警備にあたっていたファミリストンのところへ伝えにきた。
「伝令…？」
ゲルニア国は、ティファレン城、その城下町、そして、グロン村を入れて、3つの村で成り立っている。平和過ぎるため、よほどのことがない限り伝令などがくることはない。
ファミリストンの記憶にも残っていないくらい遠い昔である。いや、今まで一度もなかったのではないだろうか。
「誰がきた」
「はっ、メルクです」
それを聞いて、只事ではないと思った。
メルクは、元部下だった男で、当時の兵の中では非常に優秀だった。たった一人の家族である母親が病で倒れたせいで、看病せざるを得ず、軍を離脱することになった。現在は結婚し、幸せな家庭を築いている。
体力は落ちているとはいえ、昔は1・2を争う兵であった。そのメルクが伝令にきている。早急に伝えないといけない重要事項なのだ。
「わかった。通せ」
ファミリストンは久しぶりに部下の顔を見た。以前よりは顔に肉が付いている。部下の幸せな暮らしを想像した。
「お久しぶりです。将軍」

こった出来事を話始めた。
「ああ、久しぶりだ、元気か」
「はっ」
「おい、そう重々しくなるな」
メルクは少し笑顔を見せたが、すぐに真顔に戻り、グロン村で起

　グロン村からの伝令を聞いたファミリストン将軍は王の間の扉を叩いた。
　王の間といっても、セラミス王の寝室である。今はここが王の間となっている。
「入るがよい」
　威厳のある重い声が聞こえた。
「はっ」
　ファミリストンは扉をゆっくりと開けた。窓から入る太陽の光に照らされて、国王は寝台で横になっていた。
　セラミス王。たった1代でゲルニア国をまとめあげた男。今は高齢のため、動くことはままならないが、当時は民のことを優先し、率先して行動を起こす英雄だった。
「いきなりなんだ、ファミリストン。国王はお疲れなのだぞ」
　隣にいた宰相のハミルが声を荒げた。ファミリストンは深々と膝をつき、頭を下げた。傍には何事かとスライ将軍もいた。
「失礼は承知の上でございます。緊急の用件ゆえ、何卒お許し下さい」
　まだ何か言いたそうなハミルをセラミス王は制した。
「…よい。申してみよ、ファミリストン」
「は。先程グロン村から伝令がきまして。どうやら、異国の者が流れ着いたと」
「なんと」すぐ反応したのはハミルだった。「早く捕まえるのだ」
「いえ、その者が何者なのかもわかりません。まずは様子を見よう

かと」
「何を悠長なことを。油断させるのが目的かもしれんじゃないか」
セラミス王が国を立ち上げた時から、辛い時もずっと隣で手助けをしてきたハミル宰相からすれば、若いファミリストンのようなその当時のことを知りもしない者に意見など言われたくないのだろう。自分の言葉は王の言葉。それに反論されるのが気に入らないのだ。
「仮に暴れても取り押さえるように警備をしっかりします」
「そんな根拠はあるのか」
ハミルの目の敵したような言葉に、ファミリストンは揺るぎない視線で答えた。
「あります。私自ら村へ行きますので」
「…っ」
将軍自ら進言されるとハミルにはもう言葉はなかった。全責任は自分が負うと言っているようなものだ。初めからそのつもりだったのか、ハミルへの対抗からなのかはわからないが、ファミリストンの瞳には少し怒りに似た輝きが見えた。
「わかった。くれぐれも気をつけるのだぞ、ファミリストン」
「はっ」
セラミス王の言葉を聞き、若き将軍は王の間を出て行った。
スライは言葉を呑んだ。刺激を欲しているもう一人の若き将軍の思いは、真っ先にその村へ駆けつけたい気持ちでいっぱいだったのだ。だが、ここはファミリストンの顔を立てた。
ファミリストンの後ろ姿を悔しそうにハミル宰相は目で追った。

つづく。

第1部　第1章　白髪の男　その3

グロン村は段々と落ち着きを取り戻していた。人々も目を覚まさない白髪の青年に飽きてきたのか、一目見ると後は自分達の仕事の続きを始めた。

幸い外傷もなく、寒さで凍傷の可能性があっただけで、命に別状はなかった。若い男の体力は並外れたものがある。回復には時間かかるかもしれないが、明日には意識くらいはしっかりするだろう。

伝令に行ったのだから、当然城の人間が村に来る。来るまでは、誰かが看病と監視も兼ねて付いていなくてはいけない。

その役目にボズが選ばれた。もし突然目が覚めても傍に子供がいれば、身の危険を感じる状態に陥ることはないという判断だった。部屋の外には大人の見張りが付く。

ボズは大役を任されたということで舞い上がっていた。コウミや他の友達の羨ましいという視線を背中に浴びることになった。

「ボズ・気をつけてね」

昔から好意を抱いていたアリシェが心配そうに言ってきた。普段話しもないのに話しかけれられたことで、ボズはますます舞い上がった。

面白くないのはコウミである。密かにコウミもアリシェに行為を持っていた。

「ふん、起きもしない奴をただ見てるだけだろ？くだらねえ。そんな簡単な事、気をつけるもなにもねえよ」

負け惜しみを言うコウミを相手にせず、ボズは青年が寝ている空き家へ入っていった。

辺りは暗くなり始め、静寂が訪れてきた。

「そうか、お前が離れてもう9年くらいになるのか」

グロン村へ向かう道途中、ファミリストンは懐かしそうに言った。メルク、そして部下である兵5人を付き従えてゆっくりグロン村へと馬を走らせている。日も落ちてきて、このままだと、村へ着くのはかなり夜の深い時間になるだろう。
「今では、娘が一人います」
メルクは恥ずかしそうに笑った。
「あの鬼のメルクさんが、家庭を持つなんて信じられません」
かつてメルクの下で鍛えられた兵士から見ると、その厳しさからは想像できない笑顔を見て驚いて言った。その言葉に皆の笑い声が響く。
「確かにそうかもな。私から見ても、メルクのその体型は問題だぞ」
「全く、将軍までそんなこと言わないでください」
再び笑い声が木霊した。

遠くの丘で、女が一人、グロン村を見つめていた。
薄い布を身体に巻いているだけのその格好は、明らかにゲルニア国の人間ではなかった。ゲルニアの人間ならば、寒さに耐えるため、防寒服や、もっと厚い服を着込むからだ。
女はしばらく村を見ていたが、突然手の平に涎を垂らしだした。その手をそのまま地面に向けると、呟き始めた。それは呪文のようなものだった。
呟きが終わると、立っている場所を中心とし、地面から数本の腕が女を囲むように飛び出してきた。
人の腕ではない。その腕は、ドス黒く、皮は爛れ、爪は長く鋭かった。
異形の怪物が数十体、地面から生まれた。
美貌の持ち主であるはずの女の笑顔は、醜く歪んだ。

村の空き家を使って、青年を寝台に寝かせていた。
特にすることもなく、ボズは青年の綺麗な白い髪に見とれていた。時間にしてそんなに経っていなかったが、数時間もの時が過ぎたような感覚に思えた。
美しい髪と静寂が重なって、ボズの目は静かに閉じていった。

ボズは夢を見ていた。
英雄になる夢。世界を救う夢。アリシェと結婚している夢。
人々の歓喜の声が聞こえる。コウミの悔しそうな泣き声が聞こえる。
憧れのファミリストン将軍から褒められる。セラミス王からも英雄の称号を得る。
照れ臭そうにしている父親。嬉し泣きのため顔がくしゃくしゃになっている母親。アリシェの尊敬の眼差し。
そして、今まで聞いたこともない咆哮。悲鳴。叫び声。
・・・雄叫び。

ボズが我に返ると、異様な雰囲気に村が覆われていることを感じた。
辺りから呻き声が聞こえてきた。寒気が全身を突き抜ける。同時に悲鳴と人間のものとは思えない鳴き声が沸きあがった。夢の中で聞こえた雄叫びだった。
慌てて部屋の窓から外を窺った。
ボズのその純粋な瞳に映ったのは。
異形な怪物に襲われているコウミの姿だった。
「わっ、わっ、わあああ」
泣きながら逃げるコウミに容赦なく怪物は鋭い爪を振り下ろした。
村には数十体の怪物が殺戮を繰り広げ、立ち向かおうにもその圧

倒的な力に村人達はなす術もなく倒れていった。
ボズは真っ青になって止まるはずもない身体の震えを必死で抑えていた。
目の前で友達が殺された。知っている大人達が殺されている。親はどうなったのだろうか。どうしてこの村に。あの怪物はなんだ。どうしてこの村を。
色んな思考が脳裏を過ぎる。声が出ない。
雄叫びと悲鳴が近づいてきた。すぐにでもこの部屋に怪物が飛び込んでくる。ボズはもう恐怖で動けなくなっていた。
ボズは頼るしかなかった。
島に流れ着いた異国の人間に。話したこともない異国の男に。名前も知らぬ異国の者に。
「…君は誰だ。…なぜ泣いている」
そして、深い眠りから覚めた、美しい白き髪の青年に。

つづく。

第1部　第1章　白髪の男　その4

夜も深く、ゲルニア国に、毎日訪れる静かな時間。
だが、ここは、ここだけは、違った。グロン村。突如現われた人の姿ではない悪魔の生物に村は混乱した。
獣と呼ぶべきか、怪物と呼ぶべき生物。
幼い頃に受け継がれる、太陽神と絶望神との戦い。まさにその怪物は、絶望神によって生まれた未知なる怪物と同じであった。
止まない悲鳴。止まない雄叫び。妻は子を守り、夫は妻を守る。女は家族を守り、男は村を守る。
人間と怪物の戦いが始まった。
その危機が、ボズのいる空き家にも迫ってきた。

白髪の青年はボズの恐怖に満ちた顔を見て、瞬時に只事ではないことを感じ取った。
起き上がるとまだ回復しきってないのだろう。かすかに苦痛の表情を見せるが、真顔に戻る。
「君、名前は」
「えっ、あ、ボ、ボズ、です」
「ボズ、君はここから絶対出るな。いいな。そこの下にでも隠れているんだ」
素早く神経を集中させた。雄叫びと悲鳴、肉を切り裂く音、逃げ惑う足音、剣で風を切る音。青年はボズの方を向いた。
「えっ」
青年は寝台を指差した。
青年は部屋から出て行こうとした。一人にされるという不安でたちまちボズの顔色が変わった。
「あっ、でも、１人は…」

ボズの胸中を察した青年は、ニコリと笑顔を見せた。安心させる、今まで見たことのない笑顔だった。
「大丈夫、この部屋には、誰も、何も入れさせないよ」
ボズの頭を少し撫でて、青年はドアを開けた。
「あ、あのっ、気をつけて。お、お兄ちゃん」
青年はドア閉めながら、先程の笑顔を見せて。
「ハッシュ。俺の名前はハッシュ」
扉はゆっくりと閉まっていった。

バズは襲ってくる異形の怪物達を、慣れない剣でかろうじてなぎ倒していた。
「なんなんだ！こいつらは」
絶叫しながら、振りかかる牙を、鋭い爪を、寸前のところでかわす。辺りは無残な仲間達の死体。生きながらに切り裂かれ、痛みと絶望と死への恐怖を抱いたまま息絶える。
目の前で女の子が今にも襲われそうだ。隣の家の娘であるアリシェだった。
バズは走りこんでいって剣を怪物の身体に突き刺した。断末魔を上げると怪物は倒れた。
「アリシェ、大丈夫か。お母さんはどうした」
ガタガタと震えて言葉が出ないアリシェの表情から、親は怪物の餌食になったと悟った。
「息子は、ボズはまだあの空き家か」
バズの声に、アリシェは頷いたり、頭を振ったりした。駄目だ、アリシェは精神的に壊れてしまっている。
バズはアリシェを抱えて近くの家の傍に置いてあった樽の中に入れた。アリシェは逆らうことなく入った。その目はもう呆けている。
「いいか、静かにこの中にいるんだぞ、必ず迎えにいくから」
蓋をして、バズは息子のいる空き家へと走り出した。

「ボズ、待っていろよ」
そう決意したと同時に、横から突如女が現われた。
瞬間。景色がひっくり返った。暗い空が見え、血で汚れた地面が見えた。そのまま、地面に叩きつけられる。
バズには何が起こったのかわからなかった。目の前には、首のない自分の身体がある。
薄い布で身を包んでいる女は、笑いながら見下ろしていた。痛みはない。意識が薄れる。
バズは最期に考える。息子のこと。
「ボズ…」
視界が真っ暗に包まれた。

「声が聞こえないですか？将軍」
村がもう少しで見えてくる時だった。兵の一人である、エグリアースが不安顔で話しかけてきた。
同様に、他の兵達も、異様な、邪悪な、吐き気がするような空気を少なからず感じ取っていた。軍を離れていたメルクですらも。
「声というか…。悲鳴というか…」
「…悲鳴だ」
確信の持てない部下に、ファミリストンは言った。兵達の視線が集る。
「急ぐぞ」
全員の馬が全速力で駆け出した。

村が有り得ない光景となっていた。地獄のような凄惨な世界。細切れに散らばっている人の身体の一部。もはやそれは肉の塊。所々に倒れている死体。何があったのか理解し難い。
「うっ…うっ…うわあああ」

叫びだしたメルクを兵が慌てて止めた。
「メルクさん、落ち着いてください。」
「俺の家族が！娘がぁ！」
暴れだしたメルクを押さえることができなくなっていった。
「落ち着けメルク！」
一喝。ファミリストンの声に、メルクは動きを止める。
「ここは私達に任せろ。メルク、お前は引き返し、ティファレン城へ行け」
「そんなっ！将軍！できるわけありません！俺には家族が…」
「今の冷静さを失っているお前では無理だ。お前の家族は私が間違いなく助ける。だから心配するな。それよりもこの事態を早く城に報告するのだ。いいな」
何も言わず、メルクは頷いた。その姿が、家族が生きているという希望など、既に消え去っているように見えた。
馬を村とは逆へ向けて走り出そうとするメルクにファミリストンは最後に聞いた。
「娘の名はなんという」
「…アリシェです」
「わかった。必ず助ける」
メルクは一礼し、走り出した。
メルクが遠くなったのを確認して、ファミリストンは5人の部下の方へ向き直った。
城の方はスライがなんとかしてくれるだろう。グロン村以外の2つの村も気になる。そう考えたファミリストンは決断した。
「ダストン、カムクは他の村に様子を見に行け。残ったエグリアースとウィスケル、イクパルは私と一緒にグロン村内へ入る。最優先は村人の救出だ。いいな」
「はっ」
5人は同時に返事をし、一斉に動き出した。
2人は各村へ。

ファミリストン率いる部隊は悲鳴が飛び交う地獄の中へ突入していった。

つづく。

第1部　第1章　白髪の男　その5

悪夢。
グロン村の残状にファミリストンは目眩を感じた。
まるで村だけが爆発したのかと思わせる程の破壊。人間が玩具のように、引き裂かれている。
悲鳴がする方へ馬を走らせるが、段々と小さくなっていった。
もう生きている村人はいないのかと諦めかけた時、ゴトンと音がする。瞬時に剣を抜く。3人の部下達は緊張して震えている。初めての経験なのだ。当然、ファミリストンでさえも。
音がしたのは、転げ倒れてる樽だったが、中に女の子が入っていた。身体を震わせ、焦点の合わない視線を暗い空へ向けている。
「おい、大丈夫か」
ウィスケルが近寄る。よく見ると、目元がメルクに似ているのを確認して、問う。
「もしかして、アリシェか？」
自分の名前に反応して、女の子が何度も頷く。ウィスケルがファミリストンに報告した。
「生きていたぞ、メルク」
ファミリストンはそう呟くと、馬を近づけて、アリシェを前に乗せた。よほど惨い場面を見たのだろう、涙が頬を洪水のように流れ、泣き叫んでいる表情だが、声が出ていない。小さな女の子は自分の声をあの殺戮の場所に置き忘れたのだ。
空気がピンと張る。経験不足の彼らでもわかるくらいに。
4人は素早く陣形を整えた。ファミリストンを中心に、後ろはエグリアース、右はウィスケル、そして左にイクパルが位置に付く。
「くるぞ」
ファミリストンが言った。
キシャアアアアアアアア。

甲高い雄叫びと共に、複数の怪物が飛び掛ってきた。
「ばっ化け物め！」
エグリアースが叫びながら剣を振り下ろした。

グロン村と同等の村がこの国にはあと2つある。ザロン村とギャロン村。
ファミリストン将軍の命令を受けたダストンは馬を誰よりも早く駆けさせていた。
向かっているギャロン村まではそう遠くない。ダストンの気持ちは焦っていた。村には家族がいる。グロン村のあの光景を見させられて、故郷の村を心配しないのがおかしい。
瞬時の判断のフリをして、ダストンに故郷であるギャレン村へ行くよう命令したファミリストン将軍の心遣いに感謝する。
ザロン村への命令を受けたカムクも故郷がその村である。彼も将軍に感謝していることだろう。
メルクには残念だが、あの状態で生き残りがいる可能性はないに等しい。城へ行かせたのもまた将軍の心遣いなのだ。
不安が脳裏を過ぎる。兵だとか軍だとか、それなりのつもりであるが、実戦をしたことがない。本当の命のやり取りを経験したことがないのだ。ダストンだけではない。全員に当てはまることだった。
それは、ファミリストン、スライの2人の将軍にもいえることだ。セラミス王を始めとする、一つ昔の人達ならわからないでもないが、こんな平和な島で今の若い者に実戦などを経験させることなど出来るわけがない。
村が見えてきた。何も感じない。まだ無事なようだ。ダストンは安堵した。
「あの〜…安心してるところ…邪魔するけど…」
真後ろで声が聞こえた。背筋が凍る。馬は全速力で走っているのだ。

ダストンは振り返る。男の子が馬に乗っていた。それも、ダストンの馬に。ずっとダストンの後ろにいたのだ。
「うっうわっ」
思わず馬を止めた。今の今まで全く気配がなかった。存在すらも消していたのか、あるいは気づかないことが実戦経験の欠如なのか。
５・６歳に見える子供は、馬から飛び降りた。慌ててダストンも降りて、剣を抜いた。
「なっ何者だ。貴様」
「あ〜あ、こんな子供に剣抜いちゃって。おじさん結構小心者なんだね」
あくびをしながら、男の子は言った。見た目は普通の子供だ。しかし服装が違う。赤い布で全身を纏っている。この国の服装ではない。
「貴様がグロン村を・・あんな風に」
剣を握っている手に汗が滲む。ただの子供ではない。子供の身体を借りた、もっと強大な得体の知れない者だ。
「グロン村？…わかんないな…ダヴァニータ姉さんの所かな。ま、いいや。どうせ、おじさんも…」
男の子は急に真顔になり、ダストンに向かってきた。
「死んじゃうんだからね」
血の気が引いたダストンは、剣を振り下ろしていた。恐らく生涯で最高の力、最高の踏み込み、最高の速度だった。
その最高の動きを簡単に男の子はかわす。剣の切っ先は地面に勢いよく刺さり、すぐには引き抜くことが出来なかった。
「うっうおおおお」
ダストンの気合のこもった声と同時に、剣を持っている両腕が飛んだ。両腕はダストンの身体と永遠に別れた。
「な〜んだ。おじさんも弱いんだね。さっきの人と同じだ」
さっきの人というのが、ザロン村へ向かったカムクのことだと悟った。カムクが既に殺られていた。ザロン村はもう…。

何も出来ずにいるダストンに男の子は冷静に、作ったような笑顔を出したまま。
「じゃあね、おじさん」
ダストンの人生はここで終わった。

「がっ……」
怪物の鋭い爪が、イクパルの首を貫いた。ガクリとうな垂れ、魂の抜けたその身体は剣と一緒にズルリと馬から崩れ落ちた。
「イクパル！」
ウィスケルが悲鳴のように叫んだ。
ウィスケルとイクパルは同期であり、辛い日々を一緒に励ましあってきた仲だ。イクパルの方には許嫁がいて、もうすぐ結婚という幸せの絶頂だった。そんな幸せは異形の怪物のたった一突きによって脆くも崩れ去った。
「将軍、ここは退却しましょう！数が多すぎます」
「…っ」
アリシェを抱いたままでは思うように動けないファミリストンは、剣で防御するのが精一杯で、反撃に転じることが出来ない。退却という選択は既に考えているが、数が多すぎるため、逃げ切れる根拠はどこにもなかった。
風と一緒に何かが聞こえた。怪物の雄叫びではない。もっと力強く、前を見据えた、人の、人間の声。
「おおおおおっ」
奥で固まっていた数十体の怪物達が突如吹き飛んだ。怪物の首や身体の一部が宙を舞った。
ファミリストン達を襲っていた残りの怪物の動きが止まる。
そこには。
長く美しい透きとおる白い髪の男が立っていた。手には剣ではなく、その辺に落ちていた棒を持っていた。薪を割るときに使う木の

棒である。
あの細い身体のどこにそんな力があるのか。あの鋭い爪、牙を相手にあんな物で何故そこまで戦えるのか。
ファミリストン達は、白き髪の青年に魅せられていた。
「あ、あれが、例の…流れ着いた…」
我に返ったウィスケルは思わず、主を失ったイクパルの剣を男の足元へ放り投げた。敵か味方かもわからないのに、操られるように自然と身体が動いていた。
それほどまでに、この状況での彼の登場は、鮮烈であり、この暗闇の中を照らす太陽のように見えた。
そう、太陽神の如く、眩しく凛々しきその姿に、ファミリストン達は希望を見出した。

つづく。

第1部　第1章　白髪の男　その6

異国の人間が流れ着く。前触れもない化け物の出現。村の全滅。ありえないことが一度に降りかかった今日という運命の日。
幸せな家庭は破壊され、二度と戻らぬ魂は、闇の中を永遠に彷徨うことになるのだ。
暗い世界に現われた一筋の光。白い髪の青年は真っ直ぐに立っていた。怪物を前に臆することなく向き合っていた。
ゆっくりと間合いを詰めてくる異形の怪物達。
慌てもせずに、青年は剣を取る。それは、ウィスケルが投げ渡した物である。新しく息を吹き返したその剣は、亡き持ち主イクパルの無念を晴らすために月の光を借りて煌めいた。
怪物は襲い掛かってきた。ファミリストン達を襲っていた残りも加わって約20数体が青年に集中した。
強風が突然吹いた。青年が自分を中心に剣を大きく回転させた。剣をとって最初の一撃。その一撃だけで半分以上の怪物が肉の塊となった。
考えることを知らない化け物も本能が危険と悟ったのか動きが止まる。近づけない。
「す、すごい」
ウィスケルは無意識に声が出た。命を救われたという、感謝や賞賛よりも呆気にとられて、何をどう表現していいかわからない。
初めて見る異国の力。たった1人だが、ファミリストンは我が軍との歴然とした力の差を悔しく感じた。
「この空き家に子供が1人隠れているんだ。助けに行ってくれないか」
青年の大きな声はとても綺麗な声だった。
「しかし、君は大丈夫か」
「ここは、俺が引き受ける」

「わかった、子供を確保したら、すぐに加勢にいく」
ファミリストン達は素早く馬を走らせた。実際、加勢に入ったところで自分達は足手まといになるのだろうと思いながら。

ボズは言われた通りに隠れていた。不安が小さな身体を覆う。大きな音がした。扉が開け放たれた音だ。ボズの身体がビクッと反応する。
「誰もいないのか」
聞いたことのある声。ボズの憧れである、ファミリストン将軍の声だ。
ボズは飛び出した。あまりの勢いにファミリストンは一瞬身構えたが、笑顔で迎えてくれた。
「良かった、無事か」
エグリアースがほっとしたように言った。
ボズは泣きそうになるのを我慢した。男は簡単に涙を見せてはいけないと父であるバズに教わっていたからだ。
ファミリストンの隣にはアリシェがいた。
「アリシェ！無事だったのかい」
「…」
しかし、恐怖で声を失くしたアリシェは話すことができない。ほんの少しだけ笑顔を見せたが、すぐに虚ろな表情になった。
「ところで、君を助けたのは、白い髪の男か」
ウィスケルが聞いた。ボズの瞳は輝いた。
「そうです！あのお兄ちゃんは…ハッシュさんは無事ですか？」
「ハッシュ…。加勢に行かねば」
そう呟くとファミリストンは空き家から出た。
「ウィスケル、お前は子供達を頼む。私達は彼の所へいく」
「はっ、将軍もお気をつけて」
ファミリストンとエグリアースの２人は馬を走らせていった。

またしても取り残されたボズだが、今度は1人ではない。大好きなアリシェと頼りになるウィスケルも一緒だ。恐怖を自分の内に抑え込んで、ボズはアリシェに「僕がいるから平気だよ」と強がった。

ゲルニア国の夜は寒い。普段の日中でも凍えるような気温なのに、日が落ちたら更に気温が下がる。防寒服は絶対に持ってないと身体がもたない。

初めのうちは、防寒服を着てなくても、多少は動けるだろう。それも初めの内だ。時間が経つにつれて、寒さで動きが鈍り、最後には動けなくなり、凍死する。

異形の化け物は違う。元々の感覚が鈍すぎるため、人間よりも寒さの中で長い時間動けるし、炎にもある程度は耐えることができるだろう。身体の資質、能力から違うのだから、勝てるわけがない。

馬を駆りながら、ファミリストンは思う。

白い髪の青年、ハッシュも戦闘が長引けば長引くほど不利になっていく。ただでさえ、何も着ていないに等しいのだ。

役に立たないかもしれない、だが、間に合ってくれ。ファミリストンは太陽神に祈った。

ファミリストンの心配事は全くの無駄だったことが、嫌でも認めざるを得ない。

怪物達は全滅していたのだ。ファミリストン達が、辿り着いた時には、全て片付いていた。

馬から降りて、周りを見る。

「こ、これは」

エグリアースが信じられないといった表情で眺めていた。さっきまで、苦しめられてきた怪物達の死骸が辺りに散らばっている。驚かずにはいられない。

ファミリストンは空き家からとってきた防寒服を、ハッシュに手渡した。
「ありがとう」
ハッシュは素直に言った。とても1人で怪物を相手にしたようには見えない。
「助かった、礼をいう。私はこのゲルニア国将軍、ファミリストン。そこにいるのは部下のエグリアース」
「俺はハッシュ。礼をいうのは、こちらだ。この村の人達に命を助けてもらった。それがこんなことになるなんて、残念だ」
ハッシュはファミリストンと握手をし、エグリアースに会釈した。それに習って、エグリアースも一礼する。
しばしの沈黙。何も理由がなく村が壊滅したのだ。戦争での被害なら、悲しいがまだわかる。しかし、今回に関しては、情報もなにも無い所から現われたようなものだ。
沈黙を壊したのは、エグリアースだった。
「一体なんなんだ。こいつらは」
化け物を見て改めて思った。
「神話に出てくる、絶望神の怪物だ」
冷静にハッシュは言った。
「そう、可愛いこの子達は、ジャムという名よ」
後ろから若い女の声。全員が振り返る。
青い布で身体を巻き纏った美女が立っていた。この場面で、現われる怪しさ。グロン村壊滅の先導した張本人だと一目でわかった。
エグリアースが剣を抜く。
「何者だ」
「ふん、お決まりの台詞ね。しょうがないから答えてあげる。あたしはパール3兄弟の1人、ダヴァニータ。命令により、この国を滅ぼしにきたの」
そう言って、美女の顔が歪む。笑顔なのに、醜く見える。女は続ける。

「あたしの可愛いジャムちゃん達を、こんなに殺しちゃって、この後の仕事がなかったら、アンタ達全員あたしが殺してるわよ」
エグリアースの瞳に怒りの色が湧いた。
「ふざけるな。ジャムちゃんだと!?あんな化け物のどこが可愛いだ。貴様のせいで村が滅んだんだぞ」
女、ダヴァニータの顔付きが変わった。美しい顔の奥にある本性を見た気がして、エグリアースは寒気がした。
「あたしの可愛いジャムちゃんを馬鹿にしたね。アンタ邪魔だし、嫌い。死んじゃいな」
身構えたダヴァニータが、エグリアースの首を狙って襲い掛かろうとした直前。急に動きが止まる。
「ちっ」
舌打ちしたダヴァニータはそのまま身を翻し、闇の中へと消えていった。
後に残った静寂と共に、拭いきれぬ不安を抱きつつ、ファミリストンは他の2つの村と城のことを考えた。
夢ではない紛れもなく現実に起こったことだ。わからないことばりで戸惑う。
ジャムと呼ばれる怪物やダヴァニータという女。パール3兄弟。そして、命の恩人であるが、島に流れ着いた白き髪の男、ハッシュ。だが、最も最優先すべきは、国を守らねばならないこと。国の存亡に関わる敵が今、ここに出現したのだ。
ファミリストンは一刻も早く城へ戻らなければいけないことを心に言い聞かせた。

第1章　白き髪の男　終　〜　第2章　つづく。

第1回　こぼれ話

皆さんいつも読んでくれてありがとうございます。
読んでない人も来てくれてありがとうございます。

いかがでしょうか、大長編の七英雄物語。
なんとか頑張りますけど、まだまだ文章など含めて全て未熟者以下のレベルです。
回を重ねることに成長していけばと思っています。
現時点では、第1部の第1章がようやく終了しまして、次回から第2章が始まります。
ますます謎が謎を呼び、伏線なのかそうでないのか、わからなくなっていきます。
僕自身もちゃんとついていけるようにやりますので、応援してください。

さて、ここのこぼれ話ですが、ここでは、小説では書けなかった(書く力がない)部分を紹介していこうと思います。
例えば、物語の謎の部分をまとめたり、キャラクター設定など、続きをより楽しんでもらうために作りました。
本来ならば、そういった設定は作品中で出していくものなのはわかっているのですが、やはり下手な僕にはそこへの持っていき方が出来ない。
情けない話ではありますけど、備考として紹介をさせてください。
今回は第2章が始まるまでの間、数回にわけて設定などの説明をしていこうと思います。予備知識として興味のある方は読んでください。

このタイトルになっている「七英雄物語」ですが、七人の英雄達が世界を救うために力を合わせて、人との出会い別れを経験し、国同士の戦争やシガラミを乗り越えて、希望に向かって戦う話です。

今現時点での状況なので、約束はできないですが、決めているのは、全15部で、番外編を1つ、ということにしています。

1部をだいたい5章構成で考えて、1章（今回みたいに）約1ヶ月かかるとすれば・・・。完結するのに5年くらいかかる計算になります。

きっともっとかかることでしょう。気が遠くなりますが、負けずに書いていきます。

僕が今回の第1章を客観的に読んで、ここが疑問かな~と思ったことがあります。

主人公は誰なのか。7人の英雄は誰なのか。

正直内緒にしている部分なので、ここの説明はまた今度の機会で説明します。

ちゃんと、この人が主人公、この人が七英雄とお知らせしますね。

続きまして「異世界バロゲニアガルド」について。

この「異世界バロゲニアガルド」という世界観ですが。

もう単純に説明します。

最近12作目が発売された、某大人気RPGシリーズがありますよね。服装なんかも、ああいう世界観だと思ってください。

ガルド暦というのが、いわゆる西暦です。しかし、季節は春夏秋冬。1年、12ヶ月、30日、24時間。7日間で1週間。こういった設定は変えません。現実世界と同じでいかせてもらいます。季

節や時間に別の名前を付けると、本当にわけがわからなくなるのです。すみません。
飛空挺や武器などはどんな物があるのか？などは後付ですみませんが、徐々に紹介します。（考えていない）

８つの国で成り立っている世界ですが、作品中で判明してる国は次の６つです。
「アーガス」「ニゴラス」「ロクシーヌ」「ゲルニア」「ドルコルド」「バリュアス」
各国の頭文字を繋げれば「バロゲニアガルド」になるんです。
あと出てない文字は「ガ」「ル」だけですね。

「ゲルニア」「ドルコルド」「バリュアス」は島です。
残りの国は本島と呼ばれる所に密集しています。
イメージとして日本列島を思い描いてください。四国、九州、北海道が３つの島国ということになります。

今は「ゲルニア」が舞台となっていますが、他の国も段々と紹介していきます。
名称ですが、この国だから、こういう名前という統一はありません。
勝手に考えて決めています。
ほとんど思いつきですが、洋楽のタイトルなどから使ったりもしています。
その辺はどんどん紹介していきますので。

第１章に登場。
ボズの父親です。

名前の由来は特にありません。「ボズ」の「ボ」の字にちなんで、ハ行で一番しっくりくるのが「バ」だったので、「バズ」にしました。

セラミス王がバリバリの時代、戦争に反対しながらも軍に在籍していた彼は、平和な国に軍などいらないと、自主的に軍を辞めて、村でひっそりと暮らしていました。

辞めたことについては、戦争などは皆無だったことと、平和主義の国のため、咎められることもなく、円満に辞めることができたそうです。

昔兵士だけあって、今回の怪物ジャムの出現でも勇敢に戦ったのですが、謎の女、ダヴァニータにあっさりとやられました。

仮に現役だったとしても勝てなかったでしょう。

ゲルニア国の男達はほとんど元兵士が多いです。一度は皆軍に在籍しています。辞める理由の大半はバズのような平和なのに軍にいるのはおかしいということでした。

他には辞めざるを得ない、メルクの例もあります。

しかし、実戦経験がないので、いざ戦争ということになっても、全く歯が立たずにやられるでしょう。

日々鍛錬して、シュミレーションしている者がいればある程度は戦えると思いますが、そんなことをしている人って・・ファミリストンとスライの2将軍くらいでしょうね。

実は息子のボズのことを見守る役として登場させるつもりだったのですけど、いきなり死んでしまって。

僕の作るキャラってそういうの多いんですよね。こいつは最後まで引っ張るぞと決めてても次の回にはやられてる。

これからもどんどん出てきますけどね。

バズはアリシェの命を救いました。そのことが、これからどう運命に関わってくるのか。

あの世でも、ボズのことを見守っていてもらいたいものです。

賊

　プロローグで黒衣の者になす術もなくやられた賊です。
　剣の国アーガスの戦士を目指し、いわゆる落ちこぼれとなって、賊に成り下がってしまったのです。
　賊としてのグループ名はアーガス賊と非常にシンプルな名前。しかも国の名前を使っていることから、戦士への夢をまだ捨てきれないという情けなさをかもし出しています。
　そもそも、悪いことしてるので、同情の余地もないですけど、襲ったからやられたわけでありまして。襲わずに逃げればいいじゃないかという意見もあったりなかったり。
　でも・ほら・ねえ・そこの主役は黒衣の者だったしね。どんな力かなという所を見せないといけませんから。血の気の多い奴を飛び込ませました。その後、やっぱし、リーダーが逃げては駄目だなと思って、リーダー飛び込ませました。
　あとの賊は逃がして、また別の誰かがリーダーとなっていることでしょう。
　でも数日間は恐怖のために活動できなかったそうです。
　個人的な予想ですが、アーガス国に入れば必ず登場しそうなこの賊。
　これはこれで、賊のサイドストーリーがあっていいような気がしたり・・しなかったり。
　毎回やられる賊・・・・おもしろいかも。
　ちなみに、最初にやられたのは、サイショーという名前です。そしてリーダーの名前は、フタリメエといいます。今決めました。
　３人目の名前はきっと、サンニンメエだと思います。

ダストン、イクパル、カムク。
ファミリストンのお供をしたために、帰らぬ人なった3人です。
彼らは、兵士になることに憧れを感じ、見事その夢を叶えました。
ダストンとカムクは故郷の村を目前に、パール3兄弟の男の子にやられました。
この2人は実力は全然なかったのですが、連携が上手く、2人が組むとなかなかの動きをするのですが、それもみせることも出来ずに、この世を去ることになりましたね。
イクパルは結婚を間近にしていたのですが・・・残念な結果ですね。
名前の由来は、3人とも特にありません。思いついたままです。全く理由がありません。
物語の進行上、どうしても死んでしまうキャラが必要だったので、作ってしまったというのが本音なんですけど。
ちなみに、ダストンとカムクの連携名は、ダスカムスラッシュだそうです。見たかった。

第1部　第2章　崩壊　その1

夜が明けようとしていた。薄暗い空に光が射す。悪夢の夜が終わる。しかし、その悪夢は継続する。
ゲルニアに起こりつつある最大の危機を月は静かに見下ろして、時間と共に交代する。次に現われた時には、国は残っているのだろうか。
遠き孤島の運命は、誰が握るのか、理解出来るはずはなかった。

疾走。
メルクは馬の能力を最大限に出してティファレン城へ向かっていた。感覚が少しずつであるが、兵士だった頃の自分に戻っていく。
村への気にかかる思いを振り切って駆ける。ファミリストン将軍を信じている。それだけで十分だ。
城下町の入り口が見えてきて、メルクは馬の勢いを落とした。
先に人影が見えた。気のせいかと思っていたら、近づくにつれて気のせいではないことを認識した。
敵だ。
メルクは瞬時に見極めた。脳裏に色々な状況が巡る。間違いなく命に関わる危険なのは目に見えている。本来なら止まるべきではなかった。
だが、村を滅ぼされた怒り、恨みが、復讐心となって、メルクに馬を止まらせることになった。
人影は、2メートルはある大きな男だった。山の如く立ち塞がっている。仮に馬を止めなくても通過できたかどうか怪しい。
「俺は、パール3兄弟の1人、ドゥージ。お前達に恨みはないがこの国を滅ぼさせてもらう」
「なっ…なにを…」

武器を持っていないメルクは、攻撃のしようがなく、ただ驚くことしか出来なかった。
大男、ドゥージの横から、女と男の子が顔を出した。
「僕、パール3兄弟の1人、ステュー」
男の子が言った。
娘のアリシェくらいの子供の登場にメルクはますます混乱した。
「同じく、ジャム使いの、ダヴァニータちゃんです」
子供が…村を…敵…?
笑いながら女が言った。
「貴様達がっ、村を」
「うん、僕とダヴァニータ姉さんがね、あっという間にやっちゃったよ」
ステューと名乗った男の子がへらへらしている。
「あたしなんか、可愛いジャムちゃんが、全部やられちゃったのよ。変な白い髪の奴にぃ。ホント頭にくるわ。ドゥージ兄さんが呼ばなかったら、あの場で全員殺していたのにぃ」
悔しそうにダヴァニータは吐き捨てた。
「そんな所で寄り道をしている場合ではないからな。結局は皆死ぬんだ。同じことだろう」
冷静な口調でドゥージが言い聞かせた。そして、メルクを見据えて。
「まあ、そういうことだ、すぐに他の人間も後を追わせてやる。だから安心して…」
「死んじゃえ〜」
兄の言葉を代弁して、ステューがメルクに飛び掛かった。
メルクは何も出来ずに、家族の安否を思うことすらできず、死の宣告を受けた。

「ロクシーヌ国?」

城へ向かい駆ける馬４頭。ファミリストン達である。アリシェやボズを乗せているため、いつのも速さではない。城に着くまでは、まだまだ時間がかかりそうだ。
声を出したのは、ウィスケル。パール３兄弟は何者だという議題から出てきた言葉だった。
「ええ、ジャムと呼ばれた化け物は、絶望神の怪物。８国の中で絶望神を崇めている国は、異教徒の国、ロクシーヌしかない」
返事をしたのは、ファミリストン達の命を救った、白き髪のハッシュだった。島に流れ着いて看病を受けていたグロン村に、突如怪物が現われた。交戦していたファミリストンを圧倒的武力で助けたのがこのハッシュである。
ハッシュと一緒に馬に乗っているボズは、ロクシーヌ国の存在すら知らなかったのか、ハッシュの話に興味津々で耳を傾けている。
「仮に奴らがロクシーヌだとして、あそこは、アーガスとニゴラスという２つの国と戦争中だ。あれほどの強力な戦力を割いてまで、ここに来させるなんてするだろうか」
ファミリストンが言った。アリシェはファミリストンの馬に乗って、相変わらずの焦点の合わない視線。
「或いは、戦力を割いてでも、来させないといけない、何か重要なことがあるのか」
エグリアースが呟いたが、ファミリストン含めて、ゲルニア国の人間には何も心当たりがなかった。
「それはそうと」
思い出したようにウィスケルがハッシュの方を向いた。
「君はなぜここへ？」
他の２人もハッシュを見る。突然のことで、すっかり忘れていたが、もう一つの重要な事柄だ。どうして、この異国の男はゲルニアに来たのか。
しばらくの沈黙の後、ハッシュは口を開いた。
「詳しくは…言えない。言えないが…」

ファミリストンをじっと見つめた。
「英雄を探しにきた」
そう言うとハッシュは視線を下に落としてしまった。
3人は顔を見合わせる。ウィスケルはあからさまに訳がわからないという表情だった。
それ以上何も質問することも出来ずに、ファミリストンは話題を変えた。
「無茶をしたものだ。あんな服装でよくここまできたな」
「…。船が途中で荒波によって大破したのは計算外だったが、服装については全く甘かった。まさかここまでの寒さとは。国へ流れ着いたのは運が良かった」
少しだけ笑顔をハッシュは見せた。そこへ昇り始めた太陽の光が4頭の馬を照らす。ティファレン城へは遠い。

ティファレン城、城下町。
グロン村、ギャロン村、ザロン村という3つの村があり、その母体としてこの町がある。ゲルニアは村からの食料などが町に届き、そこで商売が発生する。
他国と比べると決して裕福ではないが、人々が平和に暮らせるだけの蓄えはある。
今日はいつもの毎日ではなかった。町の人々が騒いでいる。「おかしい」「どうしたんだ」「なにかあったのか」
グロン村に異国の者が流れ着いたという情報はまだ公にはなっていないはずなので、騒いでいる内容はそれではない。
町の一日は村人からの物資が届いてから始まる。今まで一度も欠かしたことのない日常に異変が起きた。
3村のどこからも届かないのだ。こんなことはなかった。
自然災害で、来れないということは過去にもあったが、必ず伝令が来るし、どこかの村は絶対に届けに来る。

更に、昨日の夜は何事もなかったため、自然災害というのは有り得ない。
「やっぱり、おかしいぞ」
町の１人が言った。
それに呼応して、他の人々も口を揃え始めた。
「うむ、確かにな、何かあったのだろうか」
「よし、見に行ってみよう」
「いや、城にも報告しておいた方がいいのでは」
意見が飛び交う中、高く大きな声が割り込んできた。
「はい、はい、は～い」
小さな男の子だった。ゲルニアの者ではない。なぜなら、身体を布で巻き覆っているという薄着だったからだ。

つづく。

第1部　第2章　崩壊　その2

ティファレン城の警備をしている人間は全部で8人と少ない。
正門に2人、城への門に2人、裏門に2人、町の中を動きながら異変がないかどうかを調査しているのが2人。小さい町なので、8人でも充分足りる。
毎日が退屈なので、ただ立っているのみという、兵士にとっては非常に辛い仕事であり、新人の役目として受け継がれている。
今日が見回りの担当だったオキュラスは、いつもの通り町の中を当てもなく歩いていた。「何か異変が」などあるわけがないと、花売り場の女の子に手を振った。軍に在籍しているのは、自分の格が上がっているように思われているようで、悪い気はしない。
オキュラスは、市場の辺りが騒がしくなっているのを見た。
「…なんだ」
市場は正門を抜けてすぐある。オキュラスは市場へ足を向けた。

毎朝、ここはとても忙しく、兵士がいることに、鬱陶しさをあからさまに態度に出す所で、オキュラスは苦手だった。
できることならば、近寄りたくはなかったが、今日は違う。毎日行われている騒がしさではない。もっと異様な雰囲気に感じた。苦手であっても何年も見てきた場所だ。
「おい、どうした」
集っている人を掻き分けて、オキュラスが鎧で包まれた身体をねじ込む。
騒がしい中心に男の子が立っていた。手を挙げながら笑顔をみせているが、一目で異国の人間だとわかった。服装があまりにも違い過ぎる。
「誰だい？この子は」

傍にいた町の人間に耳打ちする。
「知らないよ、気がついたらここにいたんだよ」
確かにあまりにも忙し過ぎて、周りに気を使う余裕がないのはわかる気がする。
「ぼく、お名前は？」
町の女の人が優しく男の子に話しかけた。
「僕、ステューって言うんだ」
笑顔で男の子は言った。
記憶がない。
もしかしたら、その格好も含めて、いたずらで村の子供がやってているのではと思っていたオキュラスだったが、ステューという名前に
小さな国なので、ある程度の情報は入ってくる。子供が産まれた、結婚した、亡くなった。その時に聞いた名前も薄い覚えで頭に残るものだが、男の子の名前だけはどんなに思い出そうとしても、出てこなかった。
「ステューはどこからきたの？」
オキュラスは前かがみに覗き込んだ。
「ん〜。教えない」
「えっ、どうして？」
「だって、どうせ皆死ぬから、教えたって意味ないもん」
何を言い出すのだこの子は。オキュラスは町人の顔色を窺った。
人々もうんざりしたように言った。
「いや、さっきもね、皆今から死ぬ運命なんだ・・って」
オキュラスは参ったという表情でステューを見た。相変わらず笑顔のままだ。
全くこんな怪しい子を入れるなんて警備は何をしているんだ・・と、遠くの正門の方へ目を向けた。
今日の当番の2人は、ミラノクとイェイスだ。この2人は適当に仕事をすることで有名だった。
「…？」

遊んでいるのだろうと見ていたオキュラスだったが、様子がおかしいことに気づく。
2人はいる。確かに正門にいる。いることはいるのだが、2人は立っていなかった。
その場に倒れているのだ。とても寝ているように見えない。そう、まるで死んでいるようだった。
「……！！」
オキュラスはステューを見た。笑顔が邪悪な顔に見えてきた。
「見た？おじちゃん」
よくみるとステューの腕が刃のような形へと変化していた。怪しく光る。
「言ったろ、皆死ぬって」
振り上げた刃の腕は傍にいた数人の首を飛ばした。鮮血が飛び散り、返り血が他の人々に降りかかるが、周りは何が起こったのか理解していない。
ほんの数秒の時間差で、叫びと悲鳴が響いた。
仰け反ったおかげで、胴体と分かれることは免れたオキュラスだが、その場に尻餅をついて苦しそうに息をしていた。見切って仰け反ったのではなく、腕が刃に変わるという現象に驚いて後ずさりした結果だ。
「きゃはははは」
ステューは逃げ惑う人々を追いかけて容赦なく斬り捨てている。
立ち上がって守らなければと思うが、完全に腰が抜けているため、立ち上がろうにも身体に力が入らない。
情けないが、彼に出来ることは一つしかなかった。異変に気づいて欲しい。その一心で出た行為だった。
「あああああー！！」
目一杯叫ぶしか思いつかなかった。仲間に届けと、城へ届けと、将軍へ届けと、王へ届けと、喉が潰れる程叫んだ。
しかし、それ以上の叫び声、悲鳴で、無念にもオキュラスの声は、

かき消された。

城の門を番しているディルとゼムの2人は、平和な町から発せられた悲鳴に動揺した。

市場のあたりから聞こえる。町中を見回っているはずのオキュラスとフェルミは何をやっているのか、ゼムは舌打ちした。

真っ先に現場へ行きたい気持ちをゼムは抑えた。今ここを離れる訳にはいかない。もし、敵が迫ってきているのなら、城が狙われるのは明白である。いつどこから敵がくるかわからない。

「一体何があったんだ」

苛立ってゼムは言った。ディルは何も喋らなかった。昔から寡黙な男なので、会話が成り立たない。

ゼムはそんなディルの態度にも苛付いた。何か言おうとして、ディルを見たが、その表情に驚いた。

前の1点を見つめたまま動かない。しかも腰にある剣に手をかけている。

まさか。・・と、ゼムはディルの見つめている方へ目を向けた。

そこには緑色の布で身を纏った、大男がゆっくりと歩いてきた。

その視線は鋭く、ゼムとディルは動けなくなり、身の危険を確信した。

「…くっ」

ゼムは恐怖を打ち払うかのように剣を抜いて、振り絞って声を上げた。

「止まれ！」

巨大な男は歩くのをやめて、止まった。

「なっ…何者だ」

「パール3兄弟・・ドゥージ。セラミス王に用がある」

当然だが、聞いたことがない名前だ。いきなり王に用があると言ってくること自体が尋常ではない。

「簡単に通すと思うのか」
「いや、思わない」
ドゥージは、ゼムとディルを交互に見た。
「力づくで通してもらう」
そう言うと、大きな手でディルの頭を掴み上げた。
「デッ、ディル」
「…っ」
そのまま、壁に投げつけた。
ディルの身体は、小石のように簡単に飛び、激突した。ぐしゃ。
と変な音がして、ディルは動かなくなった。
「くっくそ」
ゼムは剣で切りかかったが、それよりも早くドゥージの重い拳が
炸裂した。鎧をも叩き壊されて、ゼムの身体は吹っ飛んだ。
町の悲鳴を背に、ドゥージは城内へ入っていった。

つづく。

第1部　第2章　崩壊　その3

「スライ将軍！大変です」
ティファレン城内。
王の寝室…王の間へ通じる途中にある、将軍専用の部屋でスライは業務をしていたところに、兵士の1人が息を切らして扉をノックもせずに入ってきた。
「ふっ、不審者が、いっ今、この城内にっ」
初めての出来事で動転している。
スライにとっても、初めての事だ。しかし、まずは冷静になること、現状を分析してから行動する。上に立つ以上、自分が動揺しては部下に不安を与えてしまう。
「落ち着け、どういうことだ」
「はっ、先程、不審な男が、門番を倒し、城の中へと入ってきております。王に用があると。我々が止めようとしたのですが、抵抗されて…」
兵士は震えながら黙る。
「どうした。止まらないのだろう。被害はどうなんだ」
部下の様子で、状況を先取りして言った。止まらないから息を切らして報告してきてるのだ。それくらいはわかる。問題は1人の不審者を止めるために何人の兵が挑んだのかということだ。
「既に…30人の兵が…」
「なんだと？」
耳を疑った。30人の兵士が倒されたのいうのか。
「化け物か」
「そっ、それと、他にも報告が、3つの村からどこからも物資が届いていないということ、今の不審者の仲間と思われる者が、町でも同じように暴れているそうです」
敵はたったの2人…。スライは鎧を着け始めた。

村が既に滅ぼされているのか。ファミリストン達の帰りが遅いのを関係しているのだろうか。
「町へ兵士を向かわせろ。民を守るのが第一優先だ」
「しかし、そうなると、城の守りが…」
「心配するな、俺が止める」
スライは、剣を取り、勢いよく部屋から出た。

冷たくなった父の無残な姿を、アリシェは静かに抱き寄せ、その場から動かなくなった。
城へ帰る途中のファミリストン達が、捨てられているメルクの遺体を見つけたのだ。国の危機を知らせることもできず、娘の無事も聞くこともできず、悔しかっただろう。
「ちくしょう！」
ウィスケルは木を殴った。大きく揺れ、葉が落ちる。
ハッシュが突然馬から降りた。
「みんな、早く城へ行ってくれ。ここは俺が引き受ける」
「…え？」
剣を構えるハッシュの行動が理解できていない。
「あはは〜、よ〜くわかってるじゃないの」
聞きなれた女の声がした。グロン村を滅ぼした女、ダヴァニータの声だ。ハッシュは既に気配を悟っていたのだ。
木の陰から、ダヴァニータが姿を見せた。
「いいよ、白い髪の奴以外は見逃してあげる。早いとこ城にいきな。まあ、手遅れだと思うけどね」
ダヴァニータはハッシュを睨みつける。
「アンタはあたしの可愛いジャムちゃんの仇だからねぇ…」
美女は不敵な笑みを浮かべる。
「なっなにをっ」
怒るウィスケルをファミリストンが制した。

「いくぞ、今は城だ」
ファミリストンは馬を城に向かって走らせた。その後をエグリアースとウィスケルが続いた。
振り向きざまに、ハッシュはファミリストンと目が合った。「頼む」と目は語っていた。
「ボズ、君もここから…」
「嫌だ！」
ハッシュの言葉をボズは止めた。
「こいつが…村を…お父さんを…お母さんを…」
ボスの瞳には憎しみの色が現われた。家族を、故郷を、跡形もなく滅ぼされた恨み。友達を殺された恨み。アリシェの精神を壊した恨み。ボズは馬から飛び降り、護身用に持たされていた短剣を出した。
「うふふ。ぼうや、いい目しるわぁ。なに？それであたしを刺すの？」
「…こ…こ…殺してやる」
1歩1歩近づく。ダヴァニータは両手を広げて待っている。
「さあ、やってごらんなさい」
飛び掛ろうとしたその時、ハッシュの平手がボズの頬を打った。我に返ったか、ボズがその場に立ち尽くす。
「冷静になれ、ボズ。ここは俺が引き受けると言ったはずだ。君は他にやることがあるんじゃないのか」
ハッシュはアリシェの方へ目をやる。
「アリシェ…」
ボズは目が覚めた。ダヴァニータは憎い。出来ることならば自分の手で殺したい。だが、今やるべきことは、それではない。アリシェの安全をなによりも優先しなければいけない。ボズはこれからどんなことがあっても、アリシェを守るために全ての力を賭けることを心に誓った。
「わかったよ、ハッシュさん。どうか、気をつけて」

ボズは、父の遺体から離れないアリシェを無理矢理引き連れて、森の中へ逃げた。
見届けてから、ハッシュは剣を改めて構えた。
ダヴァニータの笑みが消え、右腕が刃に変化していく。
「あたし達は、身体を刃に変える能力があるのよ。そして、更に個人特有の技も持ってて、あたしは絶望神の獣をこの世に存在させることができるの」
自慢なのか、ダヴァニータが言った。
「聞いてもないことをベラベラと」
「別に。知っててもどうぜ死ぬんだから意味ないでしょ？」
「やれるもんならやってみろ」
ガキン。
言い終わる寸前に最初のお互いの一撃が交わされた。
「その綺麗な白い髪を、アンタの血で真っ赤に染めてやるわっ」
ダヴァニータが吠えた。
「できないことは言わない方が身のためだぞ」
ハッシュは静かに構えた。長く白い髪が風に揺られ、太陽の光で鮮やかに輝いた。

つづく。

第1部　第2章　崩壊　その4

「ぐっ、くっ」
ようやく立ち上がることができたオキュラスは剣を抜いた。男の子に恐怖して腰を抜かしていたなんて、末代までの恥である。
不気味な異国の子供、ステューを捜しに、悲鳴の聞こえる方へ走り出した。
行く途中、ステューによって切り殺された町人たちの死体の山。思わずオキュラスは目を背けた。
背けたもう一つの理由として、同じく町を見回っていたフェルミ、裏門にいたブルス、ネツツの3人の死体を見たからだ。
同僚の死体。鎧の意味が全くない程、切り壊されている。
村は、こいつに襲われたのだ。全滅。だから、物資がこない。届ける者が1人もいないからだ。
悲鳴が止んだ。
「まさか、そんな」
あんなに賑やかだった町が静寂になった。夜でもここまで静かなことはない。
オキュラスは前へ走る。先にある広場へ抜けた。

ステューが約20人の兵士に囲まれていた。城から援軍がきていたのだ。
異様な光景である。小さな男の子を、20人の兵士が剣を抜いて囲んでいる。この状況をいきなり見て、襲われているのは兵士達であると、誰が理解できるだろうか。
「まだやんの？勝ち目ないのに」
全然疲れを見せないステューは、困った顔をして語りかける。
「一斉にかかるぞ。子供だと思って侮るな」

兵を束ねる隊長が言った。それに続き、残りの兵も頷く。そして、ステューとの差を詰めていった。

ステューは焦る様子もなく、面白そうに兵士の動きを見ながら、楽しんでいるようだ。

「僕さあ、実はね、得意技があるんだ」

ステューの言葉を無視して、兵士達が剣を振り下ろした。中には気合の入った声も聞こえた。町の中に友人や家族がいたのだろうか、それは恨みの声に聞こえた。

数本の剣が振り下ろされたはずだが、その場にはステューはいない。神隠しにでもあったように消え去ったのだ。

「あ…」

遠くから見ているオキュラスだけにわかる。辺りを見回している兵士達の後ろにいつの間にかステューがいた。

数人を兵士が気づき、声を上げた。

「これが僕の得意技さ、簡単でしょ?」

ステューは何回か跳ねながら笑う。

「僕、素早いんだ」

兵士達が再度剣を振って切りかかる。

「見えないくらいにね」

そう言うと、ステューの姿が消えた。いや、消えたというよりか、素早く動いたのだ。だが、その素早い動きがあまりにも速いため、消えたように見える。ここにいる全ての者の目で追えないくらいの速さ、それは消えたことと同じだろう。

尋常ではない身体能力、悪魔のような笑み、オキュラスは恐怖を感じた。皆死ぬというのが、冗談とは思えない。

「ぎゃあ」「ぐは」「きっ切られた」「がは」

兵士の叫び声。見えない恐怖。あの刃で突然切られる。なす術がない。バタバタと倒れていく。聞こえるのは、兵士の声と、刃が風を切る音、同時に肉を切る音も。

僅か数分で、オキュラスを除く兵が全員切り殺された。町人をあ

っという間に殺したのもこの能力なのだろう。
「あ・おじちゃん、わざわざ見に来たの？」
目の前にステューが立っていた。オキュラスは思わず後ろに下がる。
「おじちゃんで最後だね」
笑顔を見せた男の子は、腕が変化した刃を振り上げた。オキュラスは死を覚悟し、目を閉じた。
「…」
しかし、切られない。痛みもない。恐る恐る目を開けた。
ステューを腕を上げたまま、別の方向を見ている。
その視線の先は。
ファミリストン将軍、エグリアース、ウィスケルの3人がいた。
「しょ・・将軍！エグリアースさん！ウィスケルさん！」
オキュラスは怒鳴った、感極まって涙も出てきた。
ファミリストンは周りを見て、悔しそうに下唇をかんだ。血が滲む。
「なんだよ～、まだいたのか～」
うんざりしてステューが言った。
馬から降りたファミリストンは、剣を抜く。ステューを見据えて言った。
「パール兄弟か」
「おおっ、僕達のこと知ってるんだ、さては、ダヴァニータ姉ちゃんがいた村の人だね。僕ステューって言うんだ、よろしくね」
嬉しそうにしているステューを見て、ファミリストンの握る剣に力が入る。
「エグリアース、ウィスケル、オキュラス、お前達は城へ行け。王をお守りしろ」
「え～観客いないの～？まあいいけどね、どうせ、ドゥージ兄ちゃんに殺されればいいんだよ、じゃあ、おじちゃんが僕の相手？」
「ああ、私が相手だ」

「ふ～ん、いいよ、遊んであげる」
ステューとファミリストンの2人を残して、エグリアース達は城へ向かう。オキュラスは心配そうに何度も振り返った。

ティファレン城内。
パール3兄弟、ドゥージは止まらない。
必死で止めようとする兵士達を、玩具を扱う子供ように薙ぎ倒す。
徐々に王の寝室へ近づいていく。
大きな扉の前に男が立っていた。今までの雑魚とは違う雰囲気を漂わせている男だった。
「その様子だと・・退く気はないようだな」
ドゥージは辺りをみる。兵士はもういない。この男のみ。1対1。
恐らくこの男が仕組んだのだろう。
「我が名は、スライ。将軍の位を持つ。この先がお目当ての王の間だ。だが、確かに通す気はない。通りたければ…」
「俺を…倒せ…か」
ドゥージは笑む。ここにきてやっと歯ごたえのある者と戦うことができる。
将軍、スライは剣を抜く。
「俺はパール3兄弟ドゥージ。理由あって、この国を潰させてもらう」
「そうはさせん」
2人はお互いに睨み合った。

太陽が昇る。
それに反して、ゲルニア国は堕ちていく。
崩壊していく国の運命を握るのは若き3人の戦士。
白き髪の男、ハッシュ。ゲルニア守りし紳士な将軍、ファミリス

トン。同じくゲルニア国を支えるもう一人の将軍、スライ。
対するは、謎の3兄弟、ドゥージ、ダヴァニータ、ステュー。
世界は回る、時は進む、遥か遠い小さな国で、今、存亡を賭けた戦いが開始される。

第2章　崩壊　終　~　第3章　つづく。

第2回　こぼれ話

皆さんいつも読んでくれてありがとうございます。
読んでない人も来てくれてありがとうございます。

第2章終えました。今回はパール3兄弟が城への侵入、そして町を壊すまでの話です。タイトルは「崩壊」まさにそのまま！少しは遊び心も入れろよ！と言いたいですけど。それはこれからでしょう。このセンス溢れるタイトルが出てくるのは！
あ・ちなみに、第3章のタイトルは「ゲルニア国攻防戦」です。そのまま！ハッシュやファミリストンの戦いです。頑張れ！みんな！
ここまでの気になる謎などをまとめておこうと思います。ある意味僕が訳わからなくなるための処置だったりする。・・といっても大きく分けて3つしかありませんけど。

●黒衣の者の謎。
プロローグで出てきた謎の人物です。しかし、この第1部で性別は、はっきりわかります。この者は、物語の重要な人物ですが、非常にシンプルでわかりやすい位置です。どんな役割になっているのか簡単にわかるでしょう。

●ハッシュの謎（島にきた目的・・詳しくは言えないが、「英雄を探しにきた」）
言ってんじゃんよっ！と突っ込みたくなりますが、今回の核です。物語自体の核です。英雄＝七英雄ですからね。なぜ？どうして？そしてハッシュは何者ですか？これから少しずつわかります。今はただ、戦っている彼を応援してください。

●パール3兄弟の謎（目的、出身）

明らかに敵ですけど、個人的にお気に入りの彼ら。命令でこの国に来ているのは確かですが、その裏に隠された真実とはなんでしょうか。この目的も重要する箇所です。

まだまだ出てくる謎、そして解けていく謎、これからの展開を楽しみにお待ち下さい。

勝手な企画として、別のサイトで別の小説を掲載します。世界はこのバロゲニアガルドの世界。本編では脇役の誰かを主役にするというスピンオフ企画。まあ、予定ですけど

メルク。

猛スピードで、城へ向かって馬を走らせているメルクでしたが、無事に辿り着きませんでした。

この人については本編で紹介しましたね、元、軍の人間で、母親の病気のために辞めることになった優秀な男です。アリシェの父親でもあります。

名前の由来は、彼ほど最悪な決め方はないでしょう。飲み物の「ミルク」から変えただけで、しかも意味は全くない。ごめんな、メルク。

エピソードとしては、自分にも、他人にも、厳しい人間で、妥協を一切許さない男です。従って、同僚からは疎んじられ、後輩からは恐れられていました。

真面目すぎるんですよね。その辺はファミリストンとよく似ているかもしれません。

そんな彼のプロポーズの言葉は「俺のためにガイ料理を作ってくれ」です。ふたつ返事でOKを貰ったので、隠れてガッツポーズしたみたいです。

兵士達

基本的に、兵士達は、やられるために作りあげたようなものです。ホントごめんです。特に人物設定もなく、登場だけさせて、３兄弟にやられる。

その中で唯一の生き残りは、オキュラスです。彼はまだ現在進行形で頑張ってます・・けどね。長くないような気がします。

ミラノク、イェイク、ゼム、ディル、フェルミ、ブルス、ネツツ。ご冥福をお祈りします。ゼムは頑張ったよね。ブルスとネツツは僕の好きなＮＢＡからチーム名を使いました。

個人的にはスピンオフ企画。ディルを主役とした短編が面白いかなと思います。喋らない主人公。以外に楽しいかもしれません。

第1部　第3章　ゲルニア国攻防戦　その1

ガルド歴823年。

ゲルニア国、国王セラミスは、バロゲニアガルドの本島にある魔法の国ニゴラスで産まれた。貴族でもなく、ごく普通の家庭で育った彼は、15歳になるまでは、どこにでもいる平凡な男だった。

そんなある日、ニゴラス国が、交戦中のロクシーヌ国に攻め入られる出来事があった。ガルド暦838年のことである。歴史に残る「ドリムオン作戦」勃発。ニゴラス国は致命的な壊滅まではいかなかったが、かなりの深手を追うことになる。

その戦禍で、家族を亡くしたセラミスは、世の中に絶望し、「何か」に目覚める。

セラミスはある実験を始めた。それは国を想うための行動であったが、認めてもらうことはなかった。

ガルド歴853年。

それが原因で、セラミスはニゴラス国を追放されてしまう。

行く当てもなく、流れ着いた島が、現在のゲルニア国である。

何年か後、国として立ち上げることになるのだが、ニゴラス国から見れば、非国民の国を認めるということが納得いかない。

しかし、認めざるを得ない。それだけの理由がゲルニア国に、セラミス王にあるのだが、誰も追及できないまま、月日は流れる。

そして、現在。

今、始まって以来の危険な状況に陥っている。強力な敵の存在。王の過去も知らない若き戦士達は国を守るためにその身を削って戦う。ただ、今は目の前の敵を倒すことだけを心に誓って。

ティファレン城下町入口近く、ハッシュとダヴァニータが攻防を繰り広げていた。ダヴァニータはうっとりと恍惚の表情でハッシュ

を見つめた。
「いいわぁ…アンタ…ぞくぞくしちゃう…」
何も言わず、ハッシュは剣を向けたまま睨む。
「その眼差しも…うふふ…素敵だわ。早くアンタを切り刻みたい」
誰の目にもわかるようにハッシュはかなりの剣士である。動き、状況判断、力、技、全てにおいて、ダヴァニータの上をいっている。
そもそもダヴァニータは女である。普通の男と比べれば、実戦経験も含めて負けることはないだろうが、ある程度の実力のある男であれば話は別だ。戦いは長引けば長引く程、体力にも差が出てくる。戦闘という面では、ダヴァニータは不利の立場のはずだ。
しかし、それを補い、更には圧倒的な力の差を見せ付けるために、身に付けたのが、絶望獣ジャムの召喚術だ。
何の前触れもなく、ダヴァニータは飛んだ。ハッシュが見上げる。空中に上がると、身体の方向を変えることができないため、狙いをつけられやすい。それでも、あえて、飛んだ。そんなこともわからない女ではないはずだと、ハッシュは警戒した。
ダヴァニータは、ぺっ、と唾を吐いた。あまりのことに、ハッシュも驚き、その唾液を避ける。唾液はそのまま地面に落ちた。同時にダヴァニータは呪文を唱えた。
地面から、何十体もの怪物ジャムが這い出した。
「さあ、あたしの可愛いジャムちゃん、そこの白い髪の男を殺してしまいっ」
キシャアアアアア。
複数のジャムがハッシュに襲い掛かった。

ティファレン城。城下町内。
数多くの仲間達、数多くの町の人々の、屍を背に受け、国の誇る将軍、ファミリストンは剣を構えて微動だにせず立っていた。
その鋭い眼光は、僅か6歳くらいの男の子、ステューに向けられ

ている。
　町をここまで壊滅状態に陥れた張本人、子供だがその力や冷酷さは、他のどの大人よりも抜き出ている。
「ねえ、おじちゃん。どうしたの。こないの？」
　ファミリストンは、笑顔で言うステューの言葉を無視する。挑発的な言動はこちらの思考を狂わせるためにやっているのだと思った。
「ねえ、ねえ、聞いてるの？」
　なおもしつこくステューは言ってくるが、ファミリストンは一向に耳を貸さない。
「ちぇ、つまないの。面白くないから、もうおじちゃん、死んじゃってよ」
　ステューは刃に変わった腕を振りながら、ファミリストンへ向かった。
　そこに、ステューの油断があった。子供の遊び感覚だったのだろうが、迂闊にもステューは飛び込んでいったのだ。全神経を高めて、一振りだけに賭けていた、ファミリストンの懐へ。
　ステューの身体に今までない感情が走る。寒気。悪寒。それは、恐怖。ファミリストンの獲物を狙う視線と目が合った。
「おおっ」
　ファミリストンは発した声と一緒に剣を振りぬいた。
　必死で受けようと刃をかざしたステューの右腕が吹き飛んだ。
「ぎゃあああああ」
　刃が元の姿である腕に戻り、そのまま地面にドスンと落ちた。
　ファミリストンは肩で息をしながら、うずくまっているステューを見た。誤算があった。先程の一振りは、ステューの首を、命を狙っていた一振りだった。それはどんな物で防いでこようが、まとめて斬るはずだった。
　だが、結果は右腕のみ。『右腕しか』仕留められなかった。
　神経を集中させすぎて、ファミリストンは今にも崩れ落ちそうな身体をなんとか持ちこたえさせる。

「うっ、うっ、うっ」
ステューの泣き声が洩れる。この悪魔の子供には、まだもう片方の腕がある。ゆっくりと左腕が刃へと変化していく。
「よくも…僕の…腕を…」
ステューは立ち上がった。顔を真っ赤に興奮させて、目には涙を溜めて、ファミリストンに怨恨の目を向ける。
「こっ…殺す…殺してやる。殺してやるぅ！」
ステューは雄叫びをあげた。
そして。
消えた。
「なっ」
ファミリストンが唖然とする。ステューの能力を彼は知らなかった。動きがあまりにも速いため、消えたように見えるという異常な脚力の持ち主だったことを。
恐らくファミリストンほどの戦士であれば、すぐにステューの能力を理解するだろう。
それには、まず、最初の一撃をかわしてからの話になる。
ヒュッ。
風が吹いた。瞬間。ファミリストンの両足太ももから鮮やかな血が舞った。
「ぐっ」
今度は右腕が、左腕が、斬られていく。傷は深くはないが、間違いなくファミリストンの力を削ぐには十分な攻撃だった。
斬られてから、剣を振っても遅すぎる。能力は理解した。だが。あまりの速さに目がついてこれないのだ。
ファミリストンが地面へ倒れそうになるのを、太陽は静かに見下ろしていた。

ティファレン城。城内。王の間手前。

パール3兄弟の1人のドゥージと、ゲルニア国将軍スライは、お互いの出方を探りすぎているのか、全く動かない。
少し緊張している面持ちのスライに対して、ドゥージは余裕のある表情をしている。
その場から動いていないように思えるが、ジリジリと2人は間合いを詰めていった。
「…」
「…」
沈黙の時間。
ほんの数秒の時間が、永遠にも思える。
吹き込んだ風と一緒に木の葉が踊る。丁度ドゥージの目の前に被った。
その隙を逃さずに、スライが飛ぶように突っ込んでいった。

つづく。

第1部　第3章　ゲルニア国攻防戦　その2

ティファレン城。城内。
スライ将軍の快心の一撃がドゥージに炸裂する・・・はずだった。
「…馬鹿なっ」
ドゥージの身体は傷一つなかった。確かに斬られた・斬ったのだが、動じることもなく、ドゥージは「ふん」と鼻で笑った。
「そんなものか・とんだ買い被りだったな」
「き…斬った…はずなのに」
信じられないとスライは青ざめた。剣は物を斬ることができる。単純な常識だ。それを頭から覆ることが目の前で起きているのだ。
「俺の身体は生来より、鉄の如く硬き身体。どんな剣をもってしても、斬ることは出来来ぬ。それが俺の能力」
「て・鉄の身体だと」
だから、この大男は武器も持たずに構えることもしなかったのだ。斬られることがないからだ。
「俺の能力に、『コレ』が加わればどうなるか…」
ドゥージの右腕が刃に変わる…。鉄の刃。一体どれだけの破壊力があるというのだろうか。
「…っ」
スライは一旦構えたが、すぐに剣を引いた。
「ほう…」
ドゥージが感心したように言った。
諦めではない。防御が機能しないことを悟ったのだ。悟った上で、別の方法を考える。意固地に勝ち目のないやり方で戦っても意味がない。ならば、現状を認めつつ、最善の道を探すしかない。
しかし、そう簡単に良い方法など思いつくわけがない。スライの頬を汗が流れる。
ドゥージは攻撃の構えに入った。

「ゆくぞ、ゲルニアの戦士よ」
スライは思う。マトモに受けては駄目だ。避けることが大前提だ。
巨体に似合わない速さでドゥージが動いた。
重い一振りが、スライに襲い掛かる。想像以上の速さで避けることが間に合わない。受けざるを得ない。スライは、身を限界まで避けながら剣で防御する。
初めて受ける衝撃。身体に伝わる落雷ような痺れ。スライの身体は王の間の扉まで吹っ飛んだ。同時に剣が折れた。
「どうした。スライ。何があった」
扉の向こうから、宰相のハミルが叫んだ。
「…っ」
衝撃のため、声が出ない。王の安全を確保しなければならない。ハミル宰相に逃げることを伝えたいが、言葉が出ない。
「おい、スライ。答えぬか。ファミリストンはどうした」
病弱な王の妨げにならないように、王の間はなるべく騒音が聞こえないような作りになっている。そのため、町の悲鳴や、城内の出来事は知るよしもないだろう。
目の前には、ドゥージが迫ってきた。
「くぐっ・ここまで力の差があるのか…」
「その先か…セラミス王は」
スライは折れた剣を取り、両手で持つ。目を閉じ、集中する。一か八かの賭けに出た。これからやることは実戦したことがない。成功するのかどうかはスライ本人にもわからないことだった。
ドゥージは溜息をついた。
「もうやめておけ、何をやっても無駄だ」
「そ・そうはいかん。同じ死ぬのなら、やるだけのことはやって死ぬ」
「そうか…見事だな、ゲルニアの戦士よ」
ドゥージは、止めとばかりに更に近づく。
「貴様らの情報にはなかったのか？我が王はニゴラス国出身だとい

うことを」
突然のスライの問いかけに、ドゥージの足が止まる。
「当然だ、それくらいは知っている」
「ならば、ニゴラス国は魔法の国だということも？」
「当たり前だ」
スライは不敵に笑いながら喋る。
「鉄をも溶かす、灼熱の魔法があることも？」
「何が言いたい」
「その魔法を俺が取得していたとしたら？この剣にその魔法を宿し、貴様を斬ることができるとしたら？」
折れた剣が赤く、更に赤く、熱く、輝いた。スライは、灼熱の魔法を訓練し、剣との融合を密かに研究していたのだ。それは、ロクシーヌ国が戦っているやり方と同じであった。それはファミリストンも知らないことだった。
ロクシーヌ国は、剣と魔法の人々が住む国。他の国との違いは、崇める神が違うのだ。太陽神アルニヴァースではなく、絶望神メンデルゴスを崇めている、いわば異教徒の国である。ロクシーヌ国の強さは、今、まさに、スライがやってる剣と魔法の融合。その力で数々の戦争に打ち勝ち、敵を退けてきた。
スライもまたこの方法を、初めて試すことになる。
さすがにドゥージも驚いた。こんな小さな国に、そこまで出来る人間がいるなんて思いもよらなかった。襲撃した時、兵達のあまりの弱さに情けなさを感じていたからだ。
「くらえ！灼熱剣を！」
スライが叫んだ。
だが、その声に被せる様に、ドゥージは言った。
「いや、無理だな」
ドゥージは左腕をかざした。すると、一瞬でスライの剣に宿っている魔法が消えた。
「…え？」

呆気にとられるスライ。
「魔法を使えるのはお前だけではないぞ。そんな簡単に取得できるものじゃあない。未熟だからこそ、俺の風の魔法によって、簡単にかき消される程度の威力なのだ。それでは俺を倒すことはできん。魔法を使えるということには驚いたがな」
圧倒的な差。これが、世界との差。小さな国で満足していた差。上には上がいるという図式。身を持って知ることになったスライの心境はどうなのか。
「お前はよくやった。さあ、もう眠るがいい」
ドゥージの最後の一撃。
スライは再度吹き飛び、その身体は扉に叩きつけられた。扉は壊れ、部屋の中が露わになった。
「初めまして…だな…」
部屋の中には、怯えたハミル宰相、奥には老人が寝ていた。その老人こそ、ゲルニア国セラミス王。
ドゥージは、老いてなお衰えないその力溢れる王の瞳を静かに見据えた。

つづく。

「ちくしょう！」
ウィスケルの声が響いた。
城内。
エグリアース、ウィスケル、オキュラスの３人は王の間へと向かっていた。
ウィスケルは途中に倒れ息絶えている仲間達を見ながら、思わず声が出た。
城内のほとんどの壁が崩れ、兵士達の鎧は全てといっていいほど、破壊されていた。それは鎧だけではなく、中の人間も含めてだった。手足や首が異様な角度に曲がって、叩きつけられたのか、崩れた壁の中にめり込んでいる。
「なんて破壊力だ」
エグリアースが冷静に言った。それから。
「王は無事だろうか」と一言付け加えた。
その独り言にオキュラスが口を挟んだ。
「大丈夫ですよ、きっと、スライ将軍がなんとかしてくれてます」
根拠もない楽観的な言葉だが、今、頼れる希望の言葉は、これしかなかった。
ウィスケルとエグリアースは顔を見合わせ、「そうだな」と呟いた。
しかし、現実はそう甘くない。
王を守るべき希望の将軍は、既に、圧倒的な力の差をもって、叩き潰されたばかりなのだ。
セラミス王への障害はもうなにもない。
結局、オキュラスの言葉は、根拠のない楽観的な言葉に間違いはなかった。

「なんでよっ！　なんでなのよ！」
城下町入口。ハッシュ対ダヴァニータ。
ダヴァニータは怒りと悔しさで、叫ばずにはいられなかった。ハッシュが気を取られている間に、絶望獣ジャムを召喚し、後ろから襲わせるという作戦だった。成功したと思っていた。
ハッシュは全く焦らず、素早く一閃。ジャムをあっという間に倒した。それは先のグロン村での繰り返しのように見えた。
同じことを何度か続けたが、いずれも結果は変わらず、ジャム達はハッシュに傷をつけることもできずに、屍となっていった。
「無駄だ。そんなものは俺には通用しない」
「…お・おのれ。虫唾が走るこんな国でぇ」
対応する術も見つからず、ダヴァニータにはもう打つ手がなくなっていた。
彼女の脳裏に浮かんだ次なる手は。『逃亡』それしか思いつかなかった。
目の前に、もう一度ジャムを召喚させた。ジャムを盾に逃げるつもりなのだ。
「ちっ」
舌打ちをしたハッシュは、ジャムの相手をしている内に、ダヴァニータは逃げ切ってしまうことを確信した。
追う者の前に障害が現われ、逃げることだけに集中した者とでは、追いつきたくても追いつけない。
ジャムを全て倒しきった時には、ダヴァニータは、もうこの場にはいなかった。
「ボズ、君はそのまま動くんじゃないぞ」
どこにいるのかもわからないが、馬に乗りながらハッシュは大きな声で叫んだ。そして、そのまま町の中へ向かっていった。

静かになった、町の中では、1人の大人と、1人の子供が、向き合っていた。
ファミリストン将軍とパール3兄弟のステュー。
普通に見れば、親子のように見えるが、実際は違う。この2人は生きるか死ぬかの戦いを繰り広げているのだ。
形勢は、ステューが優勢。ファミリストンは目で確認できない程の速さで攻撃され、倒れる寸前をなんとか持ちこたえてはいるが、意識は朦朧として、立ってるのもままならない。
「殺してやる！こんな国の人間なんて殺してやる！」
ステューには右腕がない。少し前にファミリストンの全神経を賭けた一振りで、斬り飛ばされたからだ。
そこにファミリストンの誤算があった。彼は、その一振りでステューの命を断つつもりだったのだが、ステューの予想外の防御力のため、右腕1本だけしか仕留められなかった。
逆に怒りを倍増したステューは自身の能力である、『目にも止まらぬ素早さ』を武器として、ファミリストンに襲い掛かった。
結果、ファミリストンの鎧は斬り刻まれ、肉まで達したその傷からは血が溢れ、絶対絶命の危機を迎えた。
「ぐっ」
必死で抵抗を試みようとするが、力が上手く入らない。近づいてくるステューを退けることができないまま、なす術もなく立ち尽くす。
「もういいよ、死ねよ、てめー」
乱暴にステューは言った。…が。一瞬目眩がした。風景が違う形に歪んだ。目の前にいるファミリストンの姿も歪む。
血を流しすぎた。腕をバッサリと斬られ何の処置もしていない。いわば垂れ流しの状態で、更に勢い良く動きまくったのも原因だろう。
『斬られた』というだけならば、ファミリストンの方が酷い。しかし、傷そのものは深くはない。傷が多いためのダメージなのだ。

ふらついたステューをファミリストンは逃がさなかった。
「一刀両断！」
ファミリストンは最後の力を振り絞って、剣を振り下ろした。
「うっうわあ」
ステューが目眩から気づいた時には、ファミリストンの剣が間近に迫っていた。ステューは自分の能力を使うしかなかった。
かろうじて、避けたステューはその場に倒れ込んだ。出血と極度の身体能力の負担で意識が遠のいていく。
「くそお…」
ステューは目を閉じ、そのまま深い眠りへと誘われた。
同時に、ファミリストンも崩れ落ちた。国の、町の、村の、仇を目の前にして動かすこともできない身体に叱咤を思いながら、彼もまた目をゆっくりと閉じて眠りに落ちた。

「パール3兄弟…パール族か…」
「ほう…俺達のことは充分に知っているようだな」
王の間。
ドゥージは国の戦士達を全く寄せ付けない実力であっという間にここまできた。目的は、国の滅亡。つまりは、セラミス王の死。
宰相のハミルは王を守ろうと気持ちは先行しているが、足が動かない。王の傍へ近づけない。
ドゥージはセラミス王を睨んだ。
「お前のしたことの罪を償ってもらうぞ」
寝たままのセラミスは、少しも動じることなく、溜息をついた。
「どこまで知っているのだ。パール族の者よ」
「全てを」
「我が国の兵士、国民達は、何も知らないこと。国民を襲うのはおかしいではないか」
「そうだとしても、それを信じる根拠はない。セラミス王、お前を

殺すことは、この国をも殺すことと同じだからだ」
ドゥージはハミルへ視線を流す。ハミルは震えながら、目を逸らした。
セラミスは話を続ける。
「誰の差し金だ。パールの者であれば、やはりニゴラス国か・・」
「ニゴラス国は関係ない。誰の差し金でもない。我々パール族の一存だ」
「そうか…」と、王が笑顔を見せた。
それを見て、ドゥージの身体が震える。怒りを我慢しているようだった。
「ここにくるまで、ゲルニア国の戦士達は勇敢に、お前への忠誠心のため、国のため、尊敬に値するくらい俺に挑んできた。本当のことを知ったらどう思うだろうな。英雄だったお前が『昔ニゴラス国を追放された真実』を知ったら」
セラミス王は、ふう、と息を吐いた。
「知ることはない。なぜなら、パールの者よ、お主はここで死ぬのだから」
「何を言ってる、この老いぼれが」
ドゥージは我慢できなくなり、刃の右腕で斬りかかろうとした。
その時。
宰相ハミルが叫び、のたうち始めた。
「これが、長年の研究の、集大成だ」
セラミス王は言った。英雄などと呼ばれていた力溢れる瞳ではなく、狂気に満ちた瞳だった。
宰相ハミルの姿が変化していく。
見覚えのある姿。見覚えのある変化。見覚えのある禍々しい異形の怪物。
そして。
キシャアアアアアアアア。
聞き覚えのある声。

「ぜ…絶望獣!?」
宰相ハミルは絶望獣へと変貌していった。

つづく。

第1部　第3章　ゲルニア国攻防戦　その4

パール族はニゴラス国で生まれた。
男女の関係、寿命、どれをとっても、普通の人間と変わらない。
しかし、差別されている。その理由は、身体能力の異常な高さ、腕などの一部を刃に変化させることができる能力のおかげで、ニゴラス国でも浮いた存在だった。
一族は遠くの山奥での暮らしを余儀なくされた。華やかな街の景色を思い浮かべながら、それでも、静かに、平和に、幸せに生活をしていた。
そんな時、「ドリムオン作戦」が勃発する。ガルド暦838年、ニゴラス国に異教徒の国ロクシーヌの軍が攻め込んできたのだ。
パール族は、ニゴラス国の危機に、一族を挙げて戦争に参加した。
彼らの尋常ではない能力は大いに国の助けになった。主に戦う敵は、ロクシーヌ軍が召喚した絶望獣。怪物の力に圧倒されながらも、パール族は勇敢に戦った。
戦争が終わるにつれて、絶望獣の力に憧れを抱く輩が現われる。驚異的な力、体力、強度、魅力的なその力をなんとか自分達のモノにしたい。
一部のパール族は自分たちの特殊能力をさらに研究し、編み出したのが、専用の絶望獣を生み出す技であった。それは、ダヴァニータが使っていた技。
能力を持っているパール族ですら興味が湧くのである。普通の人間が興味を持たない訳がない。
ゲルニア国王セラミスもその1人であった。かつてニゴラス国の国民だった彼は先の戦争で、絶望獣に魅せられて、研究を始めた。
『絶望獣と人間の融合』セラミスが手を出したのは悪魔の所業。
実験の生贄になったのは、パール族だった。時には言葉巧みに、時には脅し、時には眠らせ、時には誘拐した。

主に人質をとられていた。家族の命と引き換えに我が肉体を捧げる。一族を誰よりも大事に思うパール族は家族を救うため、迷うことなく、成功するかどうかも見込めない実験に付き合った。当然だが、高確率で失敗する。失敗とは『死』である。
ニゴラス国が、セラミスの行いを発見したのが、ガルド歴853年。
生き残ったパール族は、実験の副作用で、長くはもたなかった。事実、最終的に生き残ったパール族は僅か5人。
ニゴラス国はセラミスを追放し、パール族への仕打ちは歴史の闇へ葬った。
後に、セラミスがゲルニア国として立ち上げる際、真っ先に反対したかったニゴラス国だが、闇に葬った所業の公表、弱みを各国に握られるかもしれない。その理由から認めるしかなかった。
それとゲルニア国の場所があまりにも遠くに位置していたのも、脅威とならないだろうという判断でもあった。
セラミス王の『表向きの』英雄ぶりに国民は他の国から集り、昔から慕っていた者は続いてゲルニアへ渡った。
我慢できないのは、パール族。一族を、家族を実験台にされて、殺された恨み。許すわけにはいかない。
何年かの力をつけて、子孫も少しずつだが増えていき、準備を整えた。選ばれた戦士をゲルニア国へ送る。セラミス王を、国を、討つまでは、帰ってこないその覚悟で。

「貴様…セラミス！」
ドゥージは叫んだ。
一族の悔しさが蘇る。己の都合のいい目的だけのために玩ばれた数々の命。
絶望獣と人間の融合。
一度たりとも成功していなかった。成功させたことはなかった。

それが今、目の前に、成功者として、立ちはだかっている。
絶望獣ジャムと宰相ハミルの融合。絶望獣ハミルの完成。
「国は…自分の力で守る」
セラミス王は、真横で変貌を遂げたハミル横目に若々しく力強い口調で言った。
キシャアアアアアアア。
雄叫びが響く。
セラミス王を殺そうにも、もはや遅い。堂々と前に立つハミル。
「全く…」
ドゥージは深呼吸を1回。焦りを打ち消し、いつもの冷静さを取り戻した。
「お前を討つには、この化け物を先に討たねばならないのか」
「そういうことだ、パールの者よ」
ドゥージは構える。
「我が一族の恨み、今こそ晴らす」
対してセラミス王は考え込んだ。
「ふむ…。では…私は…。お前に殺された、何も知らない、何の罪もない国民の無念を晴らそう」
トゲのある言い方をセラミスはした。確かに、何も知らないゲルニア国民を殺害したという気持ちはある。逆に、全員知っていたのかもしれない。後悔はない。国の王に仕えるのであれば、国民も敵だという考えに至った。後悔はない。ドゥージは絶望獣ハミルを見た。
人の形をしないその怪物は、ダヴァニータが召喚させる絶望獣ジャムとは明らかに違う。
ジャムは動物が凶暴に変化したような物だが、ハミルは人の姿に牙と2倍にも膨れ上がった肉体、強化された身体。ダヴァニータのジャムが小さく見える。
「王！」
後ろから声が聞こえた。
エグリアース、ウィスケル、オキュラスが現われた。

「くそっ！まさか」
「スライ将軍がやられたのか」
「なんだ、あの怪物は…っ」
口々に言葉を発し、３人とも剣を抜いた。遠くから見れば、ドゥージが絶望獣を召喚してセラミス王を襲うように見えていることだろう。
絶望獣ハミルは、ドゥージを飛び越えて、３人に襲い掛かった。
「…む。人間の意識はないようだな」
他人事のようにセラミスは言った。
絶望獣ハミルにとって、ご主人となる者はセラミス。命令を聞くのもセラミス。それ以外は敵である。人間だった時の記憶はない。
セラミス以外の目に映る者は敵との判断をした。
セラミスが一言発せれば、３人への攻撃は止められるのだが、止めなかった。３人は生き残ってはいけない。エグリアース達はセラミス王に見放されたのだ。
キシャアアアアアア。
絶望獣ハミルは、太く硬い腕で勢いよく3人に殴りかかった。
「うわっ」
３人は寸前のところでかわすことができた。空振りしたハミルの腕は床に突っ込んで、まるで床が腐った木のように簡単に穴があいた。力の大きさを感じさせる。
ドゥージは、絶望獣が、３人に気をとられている内に、セラミスの命を断てると思い、セラミスの方へ振り返った。
「…まだ立つのか、ゲルニアの戦士よ」
そこには。
ボロボロの身体に、血だらけの身体に、フラフラの身体で、盾の如くセラミス王の前に立つ、スライ将軍がいた。

つづく。

第1部　第3章　ゲルニア国攻防戦　その5

スライは物心ついた時から、将軍を約束されていた子供だった。国を守るために将来は将軍になることを誓い、目指してきた。平和な国で戦争もないもないことなどは別の話で、自分が国を担う立場になる人間だと思うことに誇りを感じた。

セラミス王の素晴らしさを肌で感じ、民を思い、時には一緒に笑い、泣き、祝福してくれる。そんな王の傍で仕えたい。命を懸けたいと思っていた。

スライにとって、王は、国は、国民は、父は、絶対なのだ。ゲルニア国を、生まれ育った国を汚す者を倒すため、簡単にはやられることはできない。スライを今、支えているのは、国を想う揺るぎない精神力だけだった。

「もう止めろ、今、俺の用があるのはセラミス王だ」

ドゥージは言った。そんな忠告は全く耳を貸さずに、スライはセラミス王の前から動かない。

「王は・・俺が守る」

武器も何もなく、マトモに戦うことなど出来ない。それでも、スライは自分の主を守るために戦う気だった。その視線はドゥージですら寒気がするほどの冷ややかな瞳。もはや既に死人の瞳。

「お前は・・・・」

セラミスの本当の姿を知らないのか。・・と言いかけてドゥージは止めた。知っていても、知らなくても、スライはその場を離れないだろう。スライにとってゲルニア国は生きる証なのだ。国を守ることを止めたら、スライは生きている意味を失う。

「見事だ、スライよ。お主こそ、ゲルニアの英雄ぞ。さあ、目の前の敵を倒すのだ」

セラミスは軽口を言う。あんな状態でどうやって戦うことができるのか。ドゥージは一瞬だが、スライに同情した。
「スライ将軍」
ドゥージの後ろから声が聞こえた。エグリアースが絶望獣ハミルの攻撃を避けながら叫んでいた。
「今、援護に向かいます」
そのためには、この眼前に迫る怪物をなんとかしなければいけない。何も考えなく暴れている怪物の予想外の動きにエグリアース、ウィスケル、オキュラスの3人は避けるだけで精一杯だ。
だが、数撃てば当たるではないが、とうとう、怪物の振り回していた鋭い爪が、ウィスケルの身体を貫いた。
「がふっ」
ウィスケルの口から血が吐き出された。
「ウィスケルさん」
オキュラスの悲痛な声が、エグリアースの耳に入る。
「ウィ・・スケル」
「ぐぐっ」
ウィスケルは絶望獣の脚にしがみ付いたそして、目で訴える。（今だ、俺に気を取られている内に、この化け物を、討て）
死を覚悟した目。死を覚悟した行動。知能の低い絶望獣が目の前にいる敵の排除に戸惑っている隙に攻撃を仕掛ければ、もしかしたら倒すことができるかもしれない。ウィスケルが粘れば粘るほど、勝機が見えてくる。
そのウィスケルの行動の意味を悟ったエグリアースは、ほんの数秒下を向いた。今までの思い出を蘇らせている、すぐに意を決したのか前を見据え、剣を構えた。
「いくぞっ！オキュラス！」
「え・あ・・は・はい！」
2人は突進した。
ウィスケルは薄れていく意識の中、必死でしがみつき、堪えてい

る。必要以上に攻撃を加えられて、身体に力が入らない。
エグリアースとオキュラスの渾身の魂を込めた剣が怪物に突き刺さろうとしたその時。
ウィスケルが息絶えた。
力が抜け、押さえていた手がその場に落ちる。
同時に絶望獣ハミルが飛び避けた。
「なっ」
エグリアース達の勢いも止まる。
動かないウィスケル。せめて一矢報うために踏ん張っていた最後の力も尽きた。
長年の仲間が次々に倒れていく。本当の実戦というものを初めて体験した時が、永遠の最期の時。二度と戻ることのない現実。８国の一つ、ゲルニア国は、完全に壊滅状態に陥っている。
「くっそおおお！」
オキュラスが怪物の後を追った。
絶望獣ハミルは、セラミスの元へ戻り始めた。ドゥージは迎え撃つように振り返るが、振り下ろした爪と、刃に変化した右腕とが交差する。一閃。ガキンと鈍い音を立てて、怪物はドゥージの横を擦り抜ける。
怪物は大きなドス黒い腕を再度振る。その先には、もう、何も見えていないのだろう、スライが無防備にも立っている。
ズシン。
スライのボロボロの身体に絶望獣の腕がめり込んだ。三度身体は飛んだ。まるで玩具のように。まるで赤子のように。まるで紙屑を投げ捨てるように。
スライの命の灯火はここで消え去る。
絶望獣ハミルは、セラミスの寝台ごと抱え上げた。
「逃げる気か、セラミス」
ドゥージは冷静に言う。
「馬鹿を言え、事情を知るお主を逃がすわけなかろう。それと・・

向こうの2人もな」
「え・・？」その言葉を聞き、オキュラスの足が止まる。
エグリアースが放心状態で目を向ける。
「今この場所を離れるだけだ。追って来い、パール族の者よ。我がいる内は生きてここから出さんぞ」
そう言うと、絶望獣は、壁を壊し、外へと飛び出した。セラミスは絶望獣に抱えられたまま、一緒に島で一番大きく高い山、アル山の方向へ消えていった。
後に残ったのは、呆然とその場に残る、エグリアース、オキュラス。死の世界へと旅立った、スライ将軍、ウィスケル。冷静に、踵を返し、無言で立ち去ろうとするドゥージ。
沈黙の風が、ティファレン城を、城下町を、グロン村を、ギャロン村を、ザロン村を吹き抜ける。
静かになったゲルニア国を太陽は照らす。
これから始まる運命と反比例して、明るく力強く地面を照らす。
寒さも忘れる熱き思いだけが、生き残った人間の身体を駆け巡った。

第3章　ゲルニア国攻防戦　終　～　第4章　つづく。

第3回　こぼれ話

皆さんいつも読んでくれてありがとうございます。
読んでない人も来てくれてありがとうございます。

さて、いかがでしょうか、第3章「ゲルニア国攻防戦」パール一族との戦い。
しかし、実は、真の悪は・・・・・という・・有り得ない急展開。
前から考えていたんですけどね、なんか無理矢理のような気がしてなりません。
皆さんいかがだったでしょうか。

戦闘シーンもボキャブラリーがないのがミエミエのワンパターン描写。
自分の文章力のレベルの低さに読み返してがっくりとうな垂れている始末です。
もっともっと勉強せねば・・・。

今回はパール3兄弟の目的が明らかになりました。
色んな恨みや思いはありますが、彼らがゲルニア国に対して行ったことは正しかったのでしょうか。

肝心な白髪の戦士、ハッシュの目的は、次回で明らかになります。
果たして「英雄を探しにきた」という、そのままの言葉の真意は？

第4章「希望と絶望の刃」
よろしくお願いします。

いきなりですが、早速設定話を書こうと思います。
「ドリムオン作戦」
ロクシーヌ国がニゴラス国へ攻め込んだ戦争です。
この戦いには本編に関わる特別な話は現時点の設定ではないと思います。
登場人物には聞いたことのなる人は出るかもしれません。
ドリムオンとは人の名前です。ロクシーヌ国の偉い人が指揮官で攻め込んできたので、「ドリムオンの作戦」という意味です。
この作戦の話を、外伝、番外編として、新主人公を登場させて、別のＨＰで書いていこうと思います。
近い将来のことですので、楽しみに（？）お待ち下さい。

それでは登場人物の紹介をしていきます。

パール族。
ついに登場パール３兄弟です。
彼らはまだまだ現在進行形ですけれど、目的や正体がはっきりしたので、ここに紹介します。
これからの動きも、もう特に謎はないキャラになっていきますので、色々な設定話を書こうと思います。
まず、洋楽のアーティストで、「パール・ジャム」というバンドがいます。
お分かりでしょう。そのままを使わせてもらいました。
「パール」はわかりますよね。
「ジャム」は・・・・そう。絶望神の獣、ジャムのことです。
３人のキャラについてですが、全員、パール・ジャムの曲名から

一部分を抜き取っています。
ドゥージもダヴァニータも、ステューも、全員曲名から名づけています。
元々完全な悪役で登場させようと思っていたのですが、話がわかりやすいので、少し変更しました。
国を襲っているのは、理由があるんだよ・・と。少し無理矢理な気がしますが。まあいいです。
第1部はモチロン、これから先も絡みがあるかどうかは、この第4章の戦いでわかります。
個人的にはドゥージ好きなんで、生き残って欲しいですけど。
パール族の者は、産まれた時から、セラミス王への恨みを聞かされて育っていくので、マインドコントロールされています。
絶対的な悪は、セラミス、ゲルニア国。いつか自分のその力で国を滅ぼすことを目標としていました。
ドゥージは29歳。ダヴァニータは25歳。ステューは8歳です。
その間には、20歳と14歳と10歳の兄弟がまだいます。
従って、あの場では3人しかいなかったので、「3兄弟」と名乗っていますが、実際は、「6兄弟」です。
残り3人の兄弟を含めて、他のパールの人間も巻き込んでこれからの物語に関わることは・・・・・うん・・まだ未定です。それは考えてないともいいます。
そもそも、パール族はセラミスへの恨みを抜きにしたら、その身体能力を買われ、隠密の仕事、いわゆるスパイなどをこなしていました。そうなると、各国に散らばっている可能性もありますが、どこに何人いて、誰がいるのかは定かではありません。
今はまだ、ドゥージ、ダヴァニータ、ステューの動向を見ていく他はパール族を追う術はないです。

スライ将軍。

書き続けていたら、死んでしまった、悲劇のキャラ、スライ将軍。
ファミリストンとは良きライバルであり、親友でした。
名前の由来は、「スライ・ザ・ファミリーストン」という黒人アーティストバンドがいます。
ゲルニア国2人の将軍名はここからとりました。
スライとファミリストン。
ゲルニア国を愛し、守ろうとした彼は、その想いを抱きつつ、やられてしまいました。
悲しいことに、セラミス王によって。
ですが、第1章の初登場の時に、『刺激のある毎日を送りたかった』とあります。
心の奥底では、あれだけの緊張感のある戦いをやってのけた彼は本望だったのではないでしょうか。
必殺の灼熱剣。
スライ自ら独学で会得したのですが、ドゥージの方が1枚上手でしたね。
享年23歳。ファミリストンと同い年です。
実は、彼は10代の時に、何体かの絶望獣と1度戦っています。
その時は、得体の知れない動物という認識だったのですが、それが、宰相ハミルの初期段階の姿だったことは、スライも、ハミル自身も覚えていることはないでしょう。
ただ、その戦いがきっかけで、剣と魔法の融合を本気で考えるようになり、後の灼熱剣へと進むのです。
結構ボロボロにやられまして、動物ごときに深手を負ったことを恥と思っており、誰にも言えなかったみたいですね。
けれど、その戦いが、国を守っていたことには彼は気づいていない。
この話はどこかで短編として、書こうと思います。

ウィスケル。

初期の頃から、いたんですが、完全な脇役状態で、いつ頃死んでいくのかな・・と思いながら、とうとう死に場所を書いてしまいました。お疲れですウィスケル。

なかなかの熱血な奴で、怒りに任せて行動するような上司泣かせの彼。

名前の由来は・・・うん・・ごめん、適当。

２１歳。あんまり、スライ達とは違わないんですよね。永遠なれ、ウィスケル。

第1部　第4章　希望と絶望の刃　その1

アル山。ゲルニアの島で一番大きく高い山。火山島ではあるが、今まで1度も噴火などの活動をしたことがない。
そんなアル山だが、今は違う。少し、ほんの少しだけど、微震と共に、異様な音を立てている。まさに、現時点のゲルニア国の行く末を察しているかのように、いつ噴火してもおかしくないようにも思える。

絶望獣ハミルに背負われ、セラミス王は山の頂上を目指す。そこを最後の決戦の場なのか、年老いたその瞳の輝きは消え去ることがない。
セラミスは独り言を発した。
「いよいよ・・我が長年の戦いに…結論が出る…」
それが、自分の死を意味しているのか、生を意味しているのかは、傍にいる獣と化したハミルにはわかるよしもない。
セラミス自身の心の奥底に秘めた確実な確信に満ちた決意なのだろう。国を1代で治めた王たる者のケジメ。道を誤る形になろうとも、貫くしかないことを感じていた。

崩れ落ちたティファレン城内。
パール族ドゥージと、エグリアース、オキュラスが向かい合っていた。冷静なドゥージに対して、真っ赤な顔で剣を貫き構えているオキュラス。かろうじて、エグリアースが静かに構えている。
「…セラミスを追わねばならん。そこをどいてもらおう」
ドゥージが言った。今、この男の興味はセラミス王の命しかなかった。

「断る。スライ将軍、同僚達、町の人々、そして村の仇！」
オキュラスが緊張した面持ちで言った。少し前までビクビクしていたとは思えない程の覚悟を決めた顔だった。
ドゥージは溜息をついた。
「お前達も見ただろう。聞いただろう。あんな王に何の忠誠を誓うのだ」
スライが死んだ時のことをドゥージは言っている。絶望獣にやられたスライ。それを召喚したのは、ドゥージではなく、セラミス王。更には、「生かしてはおかない」という、エグリアース、オキュラスに投げかけられた王の言葉。
それは疑いようのない事実。
「それでも決着をつけたいのであれば」
ドゥージはセラミスが飛び出した方向を指差した。アル山の方向。
「そこで決着をつけよう」
ドゥージはそれ以上何も言わず、２人の横を通り過ぎた。セラミスを追って、アル山へと向かっていった。
残されたエグリアースとオキュラスは、しばしの沈黙の後、歩き出した。言葉を交わさずとも、行くべき道は一つしかない。アル山で、王の真意と、王の前で、全ての決着をつけるために。

ダヴァニータは自然とアル山の方へ歩いていた。
ハッシュとの戦いの場から逃げ切った彼女は、突然の聞き覚えのある声に驚愕した。それから、何度も大きな音が響き、城が破壊されたかと思うと、セラミス王とジャムよりも数倍大きな絶望獣が飛び出してきた。
兄のドゥージがセラミスを逃したのだ。ドゥージとステューのことも心配だったが、第一優先はセラミスの命を断つこと。そのセラミスが逃げたのであれば、追わねばならない。
ダヴァニータは一族の恨みを抱え、アル山への足を速めた。

ティファレン城下町内。

ステューが目を覚ました時には、斬られた箇所の出血は止まっていた。それでも起き上がると激痛が走る。固まり始めていた血が起き上がることによりパリパリと鳴った。

ぼやけた目が段々と元に戻りかけてきた。急に怒りで頭に血が上る。目の前にまだ倒れたままのファミリストンがいたからだ。

「こ…殺す」

ゆっくりと立ち上がり、ファミリストンに近づいていく。左腕を刃に変化させて、息の根を止めるために一歩一歩進んでいく。

だが。それは叶わぬこととなった。

「ファミリストン」

入り口から、白き髪の男が走ってきた。ハッシュである。

ステューの動きが止まる。

「あ…あいつ…まさか、そんな…ダヴァニータ姉さんを…」

ダヴァニータがやられたのではないかと、ステューが驚いた。そして、更なる怒りを沸かせたが、完全に不利な状況のため、痛む腕を抱えながら、ステューはその場を離れる判断をした。

ハッシュがファミリストンの元へ来た時は、既にステューは消えていた。ハッシュはファミリストンを抱えて、頬を何度か平手で叩いた。

「おい、大丈夫か」

しばらくして、ファミリストンが「うむ…」と目を開けた。キョロキョロと辺りを見回す。ファミリストンはステューを探しているようだった。

「奴は逃げた」

ハッシュの言葉に、ふうと、息をついた。

「まずは傷の手当てだ」

「そっちは…？」
「ああ、あの女は逃げたよ」
「…そうか」
ファミリストンは城の方へ目をやった。
気まずそうにハッシュは下を向いた。その仕草をファミリストンは見逃さない。
「王は無事だろうか…」
「な・なんだ？なにがあった？」
ハッシュに掴みかかって問い詰める。
「遠くから見えていた。恐らく、王は…城から脱出したよ」
「そうか…良かった」
ほっとしたファミリストンを裏切るようにハッシュは続ける。
「あの絶望獣と一緒にな」
「なんだとっ！さらわれたというのかっ！」
ファミリストンは叫んだ。
「あの状況ではなんとも言えんが…俺には、さらわれているようには見えなかったよ」
「何を言うんだ。そんな馬鹿なことがあるわけないだろう！」
本気で怒りの瞳をハッシュに向ける。
ハッシュは遠い目で何かを見つけた。
「ならば彼らに聞くしかないな」
ファミリストンが振り返ると、意気消沈しているエグリアースとオキュラスが歩いていた。その足取りを見て、嫌な予感がファミリストンの身体を流れた。

森の中で、ボズはアリシェの手をしっかりと握りながら、歩いていた。
アリシェは何も喋らない。いや、喋れないのだ。沈黙に我慢の限界がきたのか、ボズは口を開いた。

「大丈夫かいアリシェ。疲れてない？」
ボズの言葉にアリシェは少しだけ微笑んだ。話すことは出来ないが、代わりに握っている手をもっと強く握り返してきた。
照れながらも、アリシェを絶対に守ってるとボズは誓う。２人の足は着実に前に進む。その先はアル山に続いていることをボズとアリシェは知らない。

それぞれの思いと行動を受けながら、時は進む。
誰かにとっては最高で、誰かにとっては最悪の結末が待っていることを、どの神は祝福するのだろうか。

つづく。

第1部　第4章　希望と絶望の刃　その2

「そんな馬鹿な」
ファミリストンの悲痛な声が、町中に響く。
ティファレン城下町内。
パール族なる得体の知れない者達の襲撃、村の壊滅、町の全滅、城の崩壊、ゲルニア国は絶滅寸前まできていた。
そこでの真相。部下達が見てきたことの報告を聞いて、ファミリストンは素直にその事実を受け入れることはできなかった。
スライ将軍の死。ウィスケルの死。セラミス王が絶望獣を召喚したこと。その王が全員の命を狙っていること。
「ですが…事実です。将軍」
悔しさを滲み出してオキュラスは言った。
「我が王が召喚した、あの怪物が、ウィスケルさんを殺しました。そして・・・アル山へと飛び出していったんです」
「…王がさらわれたという可能性はないのか」
僅かな希望にすがるようにファミリストンは聞いた。
言い難そうなウィスケルを見て、エグリアースが口を挟んだ。
「確かに我々は、王が怪物を召喚したところはみておりません。しかし、抵抗するわけでもなく、怪物に身体を預けながら去っていった王のその姿は…」
ファミリストンはエグリアースの続く言葉を制した。
「もういい」
力なくファミリストンは言った。
話が一旦止まったのを見て、ハッシュが喋った。
「…それで、どうするんだ？」
「当然追うさ」
オキュラスが間髪入れずに力強く言った。その瞳には決意が表れている。

「セラミス王のこともあるが、もう一つ、あのパール族は許せない。あいつもアル山へ向かっているはずだ。決着をつけてやるんだ」
エグリアースもキュラスの言葉に頷いた。家族や仲間を次々と殺された怒りは、王よりもパール族に向けられている。実際、手を下していったのは、あの3兄弟なのだ。
「そうだな…確かめるしかないな」
ファミリストンも言った。まだ半信半疑の彼は、自分の目で、耳で、確かめないと確信に変えることはできなかった。
「将軍は、深手を負っています。後からきてください。我々は先に行ってます」
オキュラスはハッシュの方を見た。
「ハッシュ…将軍を頼む」
「わかった」
ハッシュの返答を聞くと、エグリアースとオキュラスはアル山へ足を向けた。
2人が見えなくなるのを確認して、ハッシュがファミリストンに話しかけた。
「良い部下だな」
「ああ、まったくだ」
ファミリストンは、ふっ、と笑う。
本来ならば、ファミリストンの回復を待って、万全の準備を整えれば、戦力として安心してアル山まで行けるはずを、あえて、エグリアースとオキュラスは先に行く判断をした。
それは、ファミリストンへの気遣いだった。今回の件で相当なショックを受けたファミリストンは、ああは言っても、事実を目の当たりにはしたくないはずだと認識した2人は、ならば自分達で解決することを選んだのだ。
だが、2人が思っている程、ファミリストンは落ち込むような人間ではない。
「ハッシュ、すまんが、早急に手当てを頼む。早くあいつらに追い

つかねばならん」
無理して起き上がろうとするファミリストンをハッシュは支えた。
「ああ、わかってるよ」
ハッシュも、ふっ、と笑い、手当てを始めた。

約半刻後。
「ところで…」
手当てを受けながら、ファミリストンが急に話し出した。
「そろそろ教えてくれてもいいんじゃないのか？」
「なにをだ？」
ハッシュはとぼけた。
「お前がここに来た本当の理由を」
「…」
ハッシュは黙っていたが、仕方ないという風に肩をすくめた。
「当たり前のことだが、太陽神と絶望神の戦いは知っているな」
「今更なにを言うんだ。当然だろう」
この世界の神話ともいうべき戦い。太陽神と絶望神。このバロゲニアガルドが作られた最初の戦い。これがなければ、今のこの世界は存在していない。誰でも知っている話だ。ファミリストンは馬鹿にするように言った。
「その絶望神が、この世に復活する」
「なんだと？」
ファミリストンは絶句した。神話の神が、存在して、しかもこの世界に再び現われる？そんな途方もない妄想など聞く耳はないと思いかけた。だが、脳裏に過ぎる。ダヴァニータが出現させたあの異形の怪物を。その怪物こそ、まさに神話に出てくる絶望神に仕える獣、絶望獣ジャム。実物を目の前で見た今のファミリストンは絶望神が復活する話を笑い飛ばすことは出来なかった。
「その話はどこから…？」

「俺の師匠から」
ハッシュは話を続ける。
「絶望神が復活する。しかし、対抗するには太陽神しかいない。必ず太陽神もこの世に復活するはずだ。その時に、太陽神を守るべき戦士が、英雄が必要なんだ。この島に行けば、その英雄に会えるといわれてきた」
「ちょっ、ちょっと待て。いきなり話がとんでもない方向へいっているぞ」
ファミリストンは慌てて話を遮った。
「太陽神も復活するって？その神を守るための英雄が、このゲルニア国に？」
「そうだ、俺は、ファミリストン、あんただと思っている」
「なっ」
ファミリストンは目を丸くした。突然の急展開に思考回路がついていってない。
「俺はいたって真面目だ」
ファミリストンは思った。ハッシュはそうそう軽はずみで嘘をつくような人間ではない。なぜかこの短時間での付き合いなのだが確信がある。ここまで言うのだから、ハッシュの中では本当なのだろう。
「俺も詳しくは師匠から聞いていないが、俺の役目はその英雄を探すことだ。七人の英雄を」
ハッシュは手当てが終わったのか、立ち上がった。その姿を目で追うファミリストンに付け加えた。
「さあ、行こう、まずは先にやらねばならないことがあるだろう。この話はその後だ」
差し伸べるハッシュの手をファミリストンは「そうだな」としっかり握った。

つづく。

ボズはアリシェの手を握ったまま、グイグイ先へ進んでいた。柔らかいアリシェの手を離すまいと強く握っているためか、アリシェの表情が苦痛で歪んでいる。

目の前で両親が殺されるところを見てしまったために、言葉を忘れてしまったアリシェ。痛くてもそれを言葉で伝えることができない。ボズは後ろのアリシェには気づかずに腕を引っ張る。とうとう、アリシェがたまらず手を強引に離した。

ボズは振り返り、アリシェの顔を見て、そこでようやく気がついた。

「ご・ごめん、アリシェ、強く引っ張りすぎたみたいだ。痛くない？」

アリシェは下を向いたまま、大丈夫と頷いた。だが、肩で息をしている。女の子にはこの山道と、ボズの歩くペースはキツかったみたいだ。

「少し休もう」

ボズ達は立ち止り、その場に座り込んだ。

どう声をかけていいかわからず、重い空気が流れる。何を言っても気休めにしかならない。

冷たい風が吹くが、比較的気温が暖かいので、その風も心地よく感じる。それは今の時が暖かいというだけで、夜に近づくにつれ、厳しい寒さへと変貌していく。

ガサ。

奥で音が鳴る。

風も吹いているのだから、その程度の音が鳴るのは当たり前である。いつもボズなら、聞き逃していただろうが、今は状況が違う。この国が襲撃されているのだ。僅かな音も気にならないということはない。

ボズは、アリシェに動かないように言って、静かに音がした方へ歩いた。
さっきの音以外で鳴ることはなかった。気のせいかもしれないと、ボズは引き返そうとした時。
人の形をした、物体が見えた。
「…えっ」
予想外の出現にボズは度肝を抜かれた。ハッシュを初めて見つけた衝撃よりも大きかった。気のせいか、動物が横切ったくらいだと思っていたからだ。まさか、人間だとは思わなかった。
その人間は、倒れていた。
よく見ると子供の姿に見えた。
「こんなところに…？」
ボズは更に近づくと、その子供の身体中の返り血と右腕がないのを確認した。
戦慄が駆け巡る。子供は間違いなく戦闘した結果である。ボズと変わらないくらいの子供がボロボロな状態で気を失っている。
その子供は、パール３兄弟のステューだった。ファミリストンとの死闘で右腕を斬り飛ばされた。なんとかその場から逃げることができたのだが、あまりの深手のため、体力がもたず、意識が遠のいて、倒れ込んだのだ。
ボズは直感で確信した。
敵だ。
村を滅ぼした奴らの仲間に違いない。アリシェの親を殺した奴らの仲間に違いない。自分の親を殺した奴らの仲間に違いない。
ボズの頭の中に殺意が芽生える。護身用に持たされていた短剣を取り出した。今なら、村の仇を討つことができる。ボズはゆっくりと倒れているステューへ近づいていった。
あと５歩。
あと４歩。
あと３歩。

徐々に距離が狭まる。あと数歩でステューに短剣を突き刺せる間合いになる。

あと2歩。

あと1歩。

ステューの傍まで近づけた。

「…」

ボズは短剣を振り上げて構えた。自分を言い聞かせる。これは、正義のためなんだ。国のためなんだ。みんなの恨みを晴らすんだ。国を絶望のどん底まで落とし込んだ奴らに仕返しをするだけなんだ。僕達の希望ために。今ここで。こいつを殺さないと。

ボズの短剣がステューに向けて振り下ろされた。

（待て）

もう1人のボズの声が聞こえた。短剣が止まる。

（彼の希望はどうなる？）

「何が希望だ！僕の村を、みんなを殺したのは、こいつらだ！」

（復讐が正義なのか？）

「僕達を絶望に落としたのはこいつだ！」

（絶望に絶望で仕返しをするのか？）

「そ・そんなこと…知るもんか…」

（君が絶対に正しいのかい？彼には彼の理由があるとしたら？）

「人を殺すのに、国を襲うのに、どういう理由があるっていうんだ！」

（でも、君にはわかっている。本当は・・・・彼に絶望を与えることなんて・・）

声はもう聞こえない。

「…くっ…。ぐっ…」

ボズは短剣を地面に叩きつけた。弾かれた短剣は逆方向へ飛び跳ねた。

「ちくしょう！」

ボズはステューを抱きかかえた。手当てをする主な道具はない。

包帯や水程度しかない。それでも何もしないよりはマシだと、ボズはステューの身体を引きずった。
「くそ、くそ、くそ」
悔しくて涙が出た。仇が討てない悔しさ。しかし、それに反して助けている自分がいる。
ボズは絶望ではなく、希望を選んだのだ。それが吉となるのか、凶となるのかは、ステューが目覚めないとわからないことだった。

アル山の頂上には祠がある。ここには太陽神アルニヴァースが祀ってあるというのが表向きの言い分で、実際はセラミス王の実験場だった。
ここで数々の実験がなされ、初めて宰相ハミルが絶望獣として変化したのもここだった。
祠へ辿り着いたセラミスは、ヨロヨロと中へ入っていった。懐かしそうな感慨深い表情で辺りを見回す。
「ふっふっふっ、懐かしいな」
セラミスは笑みを浮かべた。
祠の中は、薄暗く、人がちょうど寝るくらいの石台がある。セラミスはここで人間を寝かせ、絶望獣を召喚し、人と獣の融合を実験していた。
ニゴラス国にいた頃は、パール族を利用していたのだが、ここにはいない。犠牲になっていたのは、宰相ハミルだった。狭い国のため、市民を利用すると、すぐに問題になる。忠誠心が高いハミルしか実験台にするしかなかった。幸い、パール族の犠牲のおかげで、どこまでいけば、命が危険かまではわかるようになっていた。ハミルが危険となれば、実験を止め、後日また再実験を繰り返した。
月日は流れ、人と獣の融合に成功した。それが、絶望獣に変貌したハミルなのだ。
「この国も終わりか…」

セラミスは溜息をついた。
「また別の土地へ移らねば…」
諦めの溜息ではなかった。
セラミスは手をかざし、呪文を唱えた。
すると、何十体もの絶望獣ジャムが出現した。ダヴァニータが召喚したジャムと同じである。もっと凶暴に見える。
「…くるがよい…パール族の者よ」
セラミスは祠内で1人呟いた。

つづく。

第1部　第4章　希望と絶望の刃　その4

グロン村が滅ぼされた悪夢の夜から半日が過ぎようとしていた。
ゲルニア国の人間はパール族によって殺された。
今、この島には、セラミス王、絶望獣になったハミル。パール3兄弟のドゥージ、ダヴァニータ、ステュー。ゲルニアの戦士、ファミリストン、エグリアース、オキュラス。グロン村の生き残りボズとアリシェ。そして、異国の白髪の男、ハッシュの１１人しかいない。
それも、これから始まるゲルニア国最後の戦いで、この地に立っているのは何人になってるのだろうか。

アル山の頂上に向けて、ドゥージは歩いていた。運が良いことに、道がしっかりと示している。今のところは、道に迷うことはない。
このまま、簡単に頂上までは行かせてはくれないだろうと、ドゥージは思う。何かしかけてくるはずだ。
そう思ったと同時に聞き慣れた叫び声。
キシャアアアア。
「ふん、やはりそうか」
ドゥージの予想していた通りだった。セラミスは必ず、絶望獣ジャムを召喚して襲わせてくるだろうと。
地響きが鳴り、だんだんと近づいてくる。相当な数のジャムが向かってきている。
ドゥージの両腕が刃に変わる。
気持ちを落ち着かせるために、すぅーと息を吸って、ゆっくりと吐く。
「ゆくぞ、セラミス」
ドゥージは、走り出し、襲いくる怪物の中に突入していった。

「今の声は」
少し遅れて、同じく頂上へ向かっているエグリアースとオキュラス。絶望獣ジャムの叫び声に反応した。
「忘れるものか、あの怪物だ」
エグリアースが言った。
「すぐ近くですね」
オキュラスも頷きながら答える。
絶望獣を扱えるのは、パール族だけではない。セラミス王も扱えるのだ。2人は、どっちの獣なのか、わからなかった。
ただ、言えることは、パール族かセラミス王が近くにいるということだった。
「いくぞ」
エグリアースは剣を抜く。
「はい」
オキュラスも辺りを警戒しながら、声の方向へと走り出した。

ハッシュとファミリストンも、アル山へ向かって、歩いていた。
早く進むように急いではいるが、ファミリストンの足取りはまだ重い。自然と動きは遅くなる。
「すまんな」
ファミリストンは申し訳ないように言った。
「仕方ない。応急処置とはいえ、すぐには動くことは出来ないさ。俺は医者でもないしな」
ハッシュは気にすることもなく言った。
アル山へ登る途中の道で、島の全体ではないが、ある一部分の海岸が見える位置がある。
ハッシュは何気なくその方を見た。動きが止まる。

「どうした？」
気づいたファミリストンが話しかけた。
「俺は、ここにくるのに、舟で向かっていたんだ」
ハッシュが急に喋りだした。
「そこで、まあ、舟がひっくり返って・・・運良く目的地に流れ着いたんだ」
「本島からそんなものでくるなんて無茶だな。その舟も小さいものだろ？ある程度大きなものじゃないと、ここまではこれないぞ」
ファミリストンも思わず答えたが、なぜいきなりそんな話をするのか理解できなかった。
「その時の舟があそこに流れ着いてる」
ハッシュは指をさした。
ファミリストンも指の先を見る。確かにその方向には、小さなボロボロになった舟が一隻見える。しかも本当に1~2人乗り舟だ。あんな舟でここまでくるつもりだったなんて、ファミリストンは呆れた。
「ああ、確かにな。それがどうかしたか？」
「俺の武器も一緒に流れているかもしれない」
「なに？武器？お前・・専用の武器なんてあるのか？」
「俺は剣士だ。やはり自分の手にしっくりくる物じゃないとな。あるかどうかわからないが、取りに行ってくる」
ハッシュの言ってることも一理ある。これから命を懸けた戦いの中で自分の武器は重要だ。今まで使い慣れた武器を持つことは大事なことだ。
「わかった、俺は先に行っている。早く取りにいってこい」
「すまん」
ハッシュは海岸へと向かった。
ファミリストンは1人で歩き出した。だが、早く進むことはできない。ハッシュが戻ってくるまでに、きっと進んでいないのだろう。
ファミリストンは今の自分の状態を悔しく思った。

「肉が裂き、剣を振るう音が聞こえる。始まったか」
目を閉じたままでセラミスが呟いた。
パール族のドゥージと召喚したばかりの絶望獣との戦い。風が運ぶ僅かな気配を感じとっているのだろうか。
セラミスの眉がピクリと動く。
「ほう・・・。誰よりも早く・・ここに辿り着いた者がいるのか」
セラミスが目を開けた。
絶望獣ハミルが唸る。
ザザッ・・。風が吹く。森の木々が揺れる。葉が飛び交い、ほんの一瞬セラミス達の前に舞う。
その隙を待っていたかのように、飛び出した影。
「セラミス！覚悟！」
飛び出して来たのはパール族ダヴァニータだった。刃に変化した腕が、セラミスに向けて振り下ろされた。

つづく。

第1部　第4章　希望と絶望の刃　その5

「死ねぇ！セラミス！」
パール族ダヴァニータが飛び込んだ。
だが、それよりも早く、絶望獣ハミルがセラミスの前に回りこんだ。
「ちっ」
身を翻してダヴァニータは斬りかかるのをやめ、間合いをとる。
セラミスの眼光が怪しくダヴァニータの姿を捉える。
「パール族の者か・・・お主も・・・」
「パール3兄弟。ダヴァニータだ。一族の恨みを受けろ、セラミス」
これまでのふざけた言動とはうってかわって、憎しみを含めて言い放った。
「ふん。この我が傑作、ハミルの攻撃をかわすことができ、なおかつ、倒すことができるのであれば・・・な」
キシャアアアアアア。
ハミルの雄叫びが大地を揺らす。
シュッ。と風を切る音がしたかと思うと、ハミルの姿はそこにはなかった。
「なっ」
ダヴァニータが目を疑う。ハミルを見失ったのだ。
「ふっふっふっ」
不敵な笑みをセラミスは浮かべる。
ダヴァニータが後ろに気配を察知した時には。
既に。
遅すぎた。
ダヴァニータは、刃がハミルと1回も交わることもなく、その場に崩れ落ちた。

「くっそう」
オキュラスが怒りの声を上げた。
「なんでだ！なんでだよ！」
声を荒げながら剣を振るう。次から次へと現われる絶望獣を薙ぎ倒している。
「そう言うな。この状況では仕方ない」
「だけど、エグリアースさん」
納得いかない顔でエグリアースを見る。
エグリアースはいたって冷静に目の前の敵と戦っている。
複数の絶望獣の声を聞いたエグリアースとオキュラスの2人は、急いで声のした方向へと走った。そこには、途方もない数の絶望獣ジャムと交戦していたパール族ドゥージがいた。
この時点で、ジャムを召喚したのはセラミス王だということがわかった。
オキュラスとすれば、真っ先にドゥージを斬り倒したかったが、襲いかかってくるジャムの相手をするはめになり、ドゥージへの攻撃はしたくても出来ない。第3者が見ると、協力して戦っているように映るだろう。
オキュラスはそれが気にいらなかった。あくまでも、仕方なしに戦っているのであって、決して一緒に協力してるわけではない。本心はジャムよりも先にドゥージの息の根を止めたいのだ。
「やめておけ、オキュラス」
隙あらば、ドゥージを狙っているオキュラスをエグリアースは諭した。下手に意識をバラバラにすると、集中力が途切れてしまい、命を落とす原因になる。まずは、今やるべきことをするしかない。
絶望獣ジャムをせん滅することだ。
「きりがないな」
ドゥージは呟いた。これほどの数の絶望獣を召喚するとは、セラミスの力は侮れない。

ちらりと、オキュラス達を見る。
「おい」
ドゥージに突然話しかけられて、オキュラスは驚いた。
「ここを抜けるぞ」
「・・・は？」
ドゥージは大きく刃の腕を振り回し、ジャム達を吹き飛ばした。
僅かだが、道が出来る。ドゥージは駆け出した。そして、振り返り
呆気にとられているオキュラスをもう一度見る。
意図を悟ったエグリアースもドゥージの後に続いた。
「こい、オキュラス」
「えっ？えっ？エグリアースさん？」
さすがのドゥージもこれだけのジャムを間を抜けることは不可能
だ。ここを切り抜けるには、エグリアースやオキュラスと一時本当
に協力してでも抜けないと脱出は困難だ。こんな所で道草している
場合ではない。一刻も早くセラミスの元へ行かないといけない。
３人は、ジャムに追いかけられながら、頂上へ向かって奥へ奥へ
と進んでいった。

海岸。
ハッシュは、打ち上げられているボロボロになった舟を見下ろし
ていた。
自分が乗ってきた舟。よくここまできたものだ。我ながら感心す
る。
ハッシュは舟の辺りを探り始めた。運が良ければ、あるはずだ。
自分専用の武器が。
引っくり返って船底を露わに出している舟本体を元に戻した。
自然とハッシュの顔が笑顔になる。どこにいくこともなく、流さ
れることもなく、ハッシュの武器は堂々と、そこにあった。

森の中。
ステューは前触れもなく、いきなり起き上がった。
「うわあ」
驚いたボズが大声を上げた。
ステューは辺りを見回す。そこには、同じくらいの男と女、ボズとアリシェしかいなかった。痛みが走ったので右腕を見た。包帯がしてあり、血が止まっていた。思わずボズを見る。
「・・・お前が・・・・」
「まあ・・全部アリシェだけどね」
ステューの問いかけに、ボズはアリシェを見ながら言った。恥ずかしそうにアリシェは俯いた。
「・・・・・っ」
礼を言いかけたが、ステューは口を閉じた。よく考えれば、子供とはいえ、憎っくきゲルニア国の人間である。恨みのある国の者に命を救われたことがわかれば、どんな叱咤を言われるか・・。だが、救ってもらったのは事実である。
「ありがとう・・」
戦闘能力は桁外れでも、ステューはまだ子供である。心の奥にまだ素直で純粋な気持ちが残っていたかもしれない。セラミスとパール族という宿命さえなければ、普通の子供として生活しているはずだ。
ほっとした表情になったボズは恐る恐る聞いてみた。
「僕はボズ。君は・・・」
「ステュー。俺の名前はステュー」
「ステュー、君は、あの、その」
言いにくそうなボズの心境を察して、ステューは答えた。
「敵か？ってことだろ」
「え、あ・・・うん」
ステューは大きく息を吐いた。嘘はつけない。ついてもすぐにバ

れるはずだ。むしろ知ってて聞いているのかもしれない。
「・・・・敵だ」
ステューは言った。
アリシェは口を押さえ、ボズの後ろに隠れた。
ボズはやっぱりという顔だったがショックは隠せなかった。
「お前らの・・知り合いや・・家族を・・殺したのも・・俺だ」
この場におられないと思ったのか、ステューは立ち上がり、歩き出した。
「・・・・・すまん」
一言告げて、ステューはアル山の頂上へ向けて森の奥へ消えていった。

つづく。

第１部　第４章　希望と絶望の刃　その６

アル山へ続く道。
エグリアース達が倒したのか、絶望獣の死骸の間をファミリストンは歩いていた。
足取り重く、山の頂上目指して進んでいたが、全く距離を稼げていない。
「・・くそ」
ふがいない自分に情けなさを感じる。
その時。
一陣の風。
ファミリストンの横を吹き抜ける人。
「・・・ハッシュ？」
走り抜けるハッシュの姿を見たファミリストンは驚愕した。それは、ハッシュの持っている剣を見たためだ。
「先に行くぞ」
すり抜けざまに言ったハッシュはあっという間に先へと消えていった。
唖然と見届けたファミリストンはその場に立ち尽くした。

セラミス王が召喚した複数の絶望獣ジャムに追われながら、ドゥージ、エグリアース、オキュラスの３人は頂上へ向けて走っていた。
途中追いつかれそうになる度に、斬り捨てながら突き進む。
だんだんとドゥージの足が加速する。
エグリアースとオキュラスとの間が離れていく。
「おっ、おい、待てよ」
オキュラスが叫んだ。
ドゥージはその叫びを無視して足を止めない。

「エグリアースさん、あいつ、俺達を置き去りにする気ですよ」
オキュラスはエグリアースを見た。
後ろから迫ってくる絶望獣をドゥージは相手にする気がない。その相手はオキュラス達に任せればいいと判断し、ドゥージ本人はセラミスの元へと行くつもりなのだ。
「・・・仕方ない、戦うぞ」
エグリアースは言った。
ドゥージの手助けをしているようになってしまったために、オキュラスは不満気な顔をしたが、このまま逃げてる間に絶望獣の餌食になるのはごめんだ。
２人は足を止め、剣を構え、迫ってくる怪物達を待ち構えた。

アル山頂上。
気配に気づいたセラミスが言葉を漏らした。
「きたか・・・パール族の戦士よ」
遠くからドゥージの姿が現われる。
少しだけ息を切らしているが、すぐに整えた。
「ここが・・お前の死に場所だ。セラミス」
ドゥージは近づきながら言った。
セラミスは高笑いした。
「くくく・・・・。先に死に場所になった者もいるがな・・・・・」
「なに？」
セラミスの視線を追う。ドゥージの目が見開いた。
そこに倒れている人は。女は。ダヴァニータだった。胸を一突きされ、息絶えている。
「セラミスゥゥゥ〜！！」
ドゥージの雄叫びが上がった。
「ほほう、冷酷だと思っておったが・・感情的になるんじゃの・・・・」

セラミスは挑発するように、魂無きダヴァニータの身体を足で踏んだ。
「もう・・ただの・・・塊じゃ。実験もできん」
ドゥージの中で何かが切れた。一族の恨み、身内を殺され、その死体にも侮辱をかけるセラミスに今まで以上の憎しみが身体中を駆け巡る。
だが、それは、セラミスの作戦であった。人間どんなことがあろうとも冷静さが一番の武器である。焦ったり、怒りはその場その場の瞬時の判断を鈍らせる。
ドゥージはその冷静さが強い。そこを崩すしか勝機がないと思っていたセラミスの前にダヴァニータが現われたのは運が良かったといえる。
そして。セラミスの予定通りに、ドゥージは怒りで身体を包み込んだ。
「セラミスゥ～！」
かつてない速さでドゥージが迫ってくる。
「ハミルよ！」
セラミスも大声を出す。
キシャアアアアアア！
突然、ドゥージの背後から、絶望獣ハミルが出現した。
隠れていたのだ。全ては作戦通り。冷静さを失ったドゥージは周りの気配を感じる前に行動を起こしたのだ。
普段なら察知できることを、ここでは見逃した。
ドゥージの能力。身体を鉄の硬度にする能力は間に合わなかった。
ハミルの大きな腕がドゥージを襲った。

「ぐっ」
エグリアースがジャムの鋭い爪を受けた。寸前でなんとかかわしたため軽傷で済んだ。

「エグリアースさん」
オキュラスがすかさず護衛に回る。連続攻撃は許さない。
全神経を集中させているせいか、一進一退の攻防が続いていた。
しかし、人間と獣。体力の差がどうしてもでてくる。どんどん低下するオキュラス達の体力に対して絶望獣ジャムの体力は底知らずだ。
僅かだが均衡が破れつつあった。
「こ・これまでか」
エグリアースが言った。
それを聞いたオキュラスは激しく言った。
「何を言ってるんですか！諦めては駄目ですよ！まだ戦えます！」
「いや・・駄目だ・・体力がもたん。オキュラス、ここは俺が死ぬ気で食い止める。お前は早く頂上へ行け」
オキュラスの言葉に首を振りながらエグリアースが答える。
「そ・そんな・何を言うんですか」
そんな2人のやりとりの隙をついて、ジャムが襲い掛かる。剣で防御しながらかろうじて避ける。
「早く・・早く行けオキュラス！何も2人も死ぬことはない。俺だけで充分だ」
エグリアースは叫んだ。・・・・。オキュラスの返事がない。まさか、避けられなかったのか？エグリアースはオキュラスの顔を見上げた。
オキュラスは遠い目をしていた。その視線は怪物を見ていない。更にその奥を見ていた。
「オキュラス？」
ジリジリと絶望獣が寄ってくる。
気にも止めずにオキュラスが言った。
「大丈夫です。エグリアースさん。助かりました」
「なに？」
「俺達は死ぬことなく、頂上へ行けますよ」

希望に満ちたオキュラスの顔。エグリアースはオキュラスの視線の方向を見る。
「・・・・・あ・・」
疾走する者。
駆け上がって来る者。
白い髪をなびかせながら。
大きな、自分の身体よりも大きな剣を片手に持って。
「な・・なんだあの武器・・大剣は・・」
白髪の男、ハッシュが現われた。
「うおりゃあああ」
ハッシュは豪快にその大剣を振り回した。
その場に集結していた絶望獣ジャムは、気づく間もなくこの世界から永遠の別れを告げられた。

～第４章　希望と絶望の刃　終　第５章　つづく～

第1部　第5章　その国、静かに滅びる　その1

剣の国アーガス。
剣士になる運命を思い描き、この国の男達は戦士を目指す。
ハッシュもまたその中の1人だった。
全ての者が戦士になれるわけではない。実力が追いつかない者、怪我や病気をする者、様々な理由で断念をする者も出てくる。
ハッシュは『断念した者』だった。
それは怪我や病気ではない。まして、実力でもない。真の理由は、差別であった。
産まれながらの白い髪。ハッシュに何の責任はない。だが世間は違う。気味悪がられ、誰も歩み寄ってこない。当然戦士への道など定めてくれなかった。そして、遂には、親からも見放された。
絶望の淵で、希望もないまま徘徊していたところに、手を差し延べた老人。それがハッシュの師匠であるクラシェイカだった。
クラシェイカはかつてアーガス国の戦士で、『アーガスにクラシェイカあり』とまで伝えられた大剣豪である。今は隠居生活をしていた。
そんなクラシェイカが、生涯初めて弟子をとったと噂される。しかも、その弟子はあの白髪の男。世間の批判を浴びせられたが、クラシェイカは全く気にすることもなく、ハッシュに自分の全ての剣を教える。
数年後。
クラシェイカはハッシュに伝えた。絶望神がこの世に蘇ること。同時に蘇る太陽神を守る戦士を集めなければならないこと。
その1人が遠き島ゲルニア国にいること。
ハッシュはクラシェイカの命を受け、この島に来た。
ファミリストンという人物と出会った。彼がその戦士だと思った。彼を救うため、連れて行くため、戦わねばならない。

絶望の獣と。ファミリストンの主君である邪悪な王と。
ハッシュの大きな剣は、ゲルニア国民の無念を乗せ、竜巻のように迫りくる絶望獣を薙ぎ倒した。

「す・・すごいな・・」
オキュラスが感心するように言った。ハッシュの戦いぶりを見るのは初めてだったにも関わらず、ハッシュの姿が見えた時の安心感。オキュラスはハッシュのことを不思議な男だと思った。
エグリアースも驚いた。戦いぶりにではない。ハッシュの持つ剣のことだ。扱う人間よりも遥かに大きな剣をいとも簡単に振っている。あの細身の身体からあれほどの力が出るなんて。
一振りでほとんどのジャムを斬り倒し、運良くかわせた、いや、当たらなかった残りのジャムも二振り目で絶命した。
「大丈夫か」
ハッシュは2人に声をかけた。
ポカンと口を開けていたオキュラスが我に返る。
「あ・ああ。ありがとう」
子供のように、純粋に言葉が出た。打算もなにもない、本音だった。
「この先か？」
ハッシュは頂上の方向を見る。
「そうだ」
エグリアースが立ち上がりながら言った。ついてくるなと言っても聞く様子ではない。
「行こう」
ハッシュはそう言って走り出した。
その速さに2人はついていくのがやっとだと思った。

「はあ、はあ、はあ」
息が切れる音。ドゥージは絶望獣ハミルの攻撃によって身体中を痛めていた。
身内を殺された怒りのため、冷静な判断が出来なくなったところを付け込まれ、ドゥージの攻撃はことごとく潰された。ようやく若干ながらも冷静さを取り戻りかけたが、その時には既に蓄積された痛手は大きかった。
「くっくっ、もう終わりか？パールの者よ」
セラミスが満面の笑みで言う。
「ふん、こんなことで俺がやられるわけなかろう」
それがドゥージの精一杯の強がりだということはセラミスにはわかっている。ドゥージには立ち上がることも出来ないということを。
「では・・トドメといこうかの・・・」
セラミスがハミルに攻撃を促そうとしたが、動きが止まる。
「くっくっくっ、しつこいのう・・・まだ・・ネズミがおったのか」
ドゥージは振り向いた。置き去りにした、エグリアースとオキュラスの2人だと思った。相手になるわけがない。それほどまでに、この絶望獣の力は大きく脅威的だ。
だが。
そこにいるのは、あの2人ではなかった。
白い髪・・・。ドゥージはダヴァニータが言っていたことを思い出す。
信じられないような大きな剣。
白き髪の戦士ハッシュが駆け上がってきた
「美しい・・・白い髪だ・・・」
セラミスは嬉しそうに言った。
ドゥージはハッシュを見る。確かに美しく白い髪。それに気をとられているセラミスに一撃を食らわせたいが、思うように身体が動かない。
「くそ」

ドゥージは動かない自分の身体に叱咤する。
「いけ、ハミル」
セラミスはハッシュを指差した。
キシャアアアア。
絶望獣ハミルは雄叫びを上げ、ハッシュ目がけて飛び掛った。

エグリアースとオキュラスが続いて上がってきた時に見えた光景は信じがたいものだった。
あの圧倒的な力を持った絶望獣。
城の全兵士が敵わなかったパール族。スライ将軍が敵わなかったパール族のドゥージ。そのドゥージを地面に叩き倒す絶望獣ハミル。
ハミルの力は常識を超えた力のはずである。
しかし、2人が見た光景は。
若き戦士ハッシュ。
白い髪の戦士ハッシュ。
大剣を扱うハッシュによって。
ハミルの腕が斬り飛ばされている光景であった。
グシャアアアア。
ハミルの悲鳴のような雄叫びが響く。
「・・・な・なんて・・・」
オキュラスが呆然と言った。その後の言葉が続かない。
「・・・奴だ」
エグリアースがその続きを付け足した。

つづく

第1部　第5章　その国、静かに滅びる　その2

ドゥージは自分の目を疑った。突然現われた白い髪の男。手には遥かに大きい剣を持っていた。その男が、あの圧倒的な力の絶望獣ハミルの腕をいとも簡単に斬り裂いたのだ。
「な・・何者だ」
ドゥージは思わず口から言葉を出した。それと同時に同じように思わず言葉を出した者がいる。
「ぬう・・あのハミルを」
セラミスだった。セラミス自身もこんなことは予想外のようで明らかに焦りを感じられた。
今だ。ドゥージは思う。今が最大のチャンスだ。セラミスは無防備の状態で、守るべきハミルは応戦中。ドゥージが動けないと安心しきっている今が最後にして最高の勝機。
セラミスは知らないのだろう。ドゥージには魔法の能力があることを。
(ほんの少しでもいい。手よ、腕よ、動いてくれ。あの邪悪な王を死へ誘う最後の攻撃をさせてくれ)
ドゥージの悲痛の思いと共に、激痛に耐えながらゆっくりと手を動かす。セラミスに気づかれては駄目だ。なにもかもが終わる。きっとセラミスは遠くへ逃げ去り、もう2度とドゥージの傍へは近寄らないだろう。油断している今だからこそ、狙うことができる。
ググッ。
腕に力がこもる。徐々に射程内へ入っていく。
(今だ！)
勝利への、復讐への最後の魔法。ドゥージの手から放たれる。
その瞬間。
セラミスの目が静かに動く。その先はドゥージ。
「ふん、しつこいのう、パール族よ」

「・・・なっ」
セラミスは老体の割には素早い動きでドゥージの顔面を蹴り上げ、魔法が放たれるであろう手を踏みつけた。
「ぐあっ」
ミシッと嫌な音が聞こえる。骨にヒビがいったようだ。
「あえて泳がせたが、やはり、仕掛けてきたか。お主らはそう簡単に諦めるわけがないよのぅ」
セラミスの笑顔が今までで一番醜く歪んだ。
「ぐ・・セラミスッ！」
怒りが無限に溢れ出る。悔しさがオーラとなって身体の中から発現する。
「その表情だと・・もう何もないようだな」
セラミスは決して油断はしていなかった。事実、神経を研ぎ澄ましていた結果、ドゥージの動きにも対応できたのだ。この用心深さが、若き日ニゴラス国で起きた「ドリムオン作戦」でも生き残った理由かもしれない。
だが。
ドゥージの攻撃を封じ。
ドゥージの打つ手なしの顔を見て。
慢心したのか。
それが・・・・油断だった。
「うわあああ」
子供の大きな声と一緒に、片腕の子供が飛び出してきた。
「ステュー！」
ドゥージが叫んだ。
「ぬおっ」
セラミスは完全に虚を突かれた。まさかいるわけがないと確信していたところへいきなりの出現。セラミスの冷静な判断と思考回路は乱れた。
ステューの腕は刃と変化している。

セラミスは間一髪かわせると判断し、最小限の動作で身をよじる。
しかし、セラミスの思い描いた動作と異なる。動作が遅れた。
愕然とするセラミスの脚を、ドゥージがしっかり抑えていた。ドゥージが密かに笑みを見せる。
「きっ貴様ぁあぁあぁぁぁぁぁ」
セラミスが吼えた。
ズン。
ステューの刃は。
セラミスの身体を貫いた。
「がふっ」
口から大量の血を吐き、セラミスは倒れた。
一緒に倒れこんだステューはすぐに立ち上がり、トドメの一撃をセラミスに叩き込む。刃は再度セラミスの身体を貫く。
返り血を浴び、肩で息をしながらステューはその場に立ち尽くした。
「お・・お前・・その腕」
片腕がないことに気づいたドゥージが驚きのあまり言った。
「あ、ドゥージ兄ちゃん。やったよ。俺」
気にすることなくステューは笑った。今はそれよりも一族の敵を殺すことができて嬉しいのだろう。
つられてドゥージも笑いかけた。
キシャアアアアア。
絶望獣の雄叫び。
ハッシュとハミルの死闘が熱を帯びてきたのか、これまで聞いたどの雄叫びよりも鋭かった。
ドゥージとステューはハッシュの方へ目を向けた。
・・・が。
ドドン。
変な音が響いたかと思うと、ステューの身体が吹っ飛んだ。
「・・・えっ」

そのままステューは大木に叩きつけられた。
「・・・・あ」
ドゥージは心の底から震えた。
聞いた雄叫びは、ハミルの雄叫びではなかった。
「礼を言うぞ・・パールの者よ」
その雄叫びの真の主は。
「我も最高の力を手に入れた」
セラミスの雄叫びだった。

つづく。

第1部　第5章　その国、静かに滅びる　その3

数々の実験の中で、セラミスが見出した最後の方法。自分自身の半永久的な命と最強の力を手に入れるには、自分が絶望獣になるしかない。

一度「死」を受け入れての融合。人間としての意識。

他の実験で人間としての意識を持たれて怪物になってしまうと、いつ逆に襲われるかわからない。

最高の怪物として、そうなるのは自分しかないと決めていた。

セラミスは人間の姿を捨て、怪物という道を選んだ。

「冗談だろ、おい」

オキュラスが困惑した声を出す。

目の前で起きていることは現実なのか。ハッシュと絶望獣ハミルとの戦いではない。その奥で起きていることだった。

パール族ドゥージとセラミス王の戦い。見る限りは、同じパール族のステューの登場でセラミス王が倒されたかに見えた。

なんとその後、セラミス王が立ち上がった。ステューを軽々と吹き飛ばして。

その姿。セラミス王が異形の怪物。絶望獣へと変化していた姿だった。

「セラミス・・・王が・・・そんな」

落胆するオキュラス。どこかでまだ王のことを信じていたのかもしれない。全ては何かの間違いだったと。そんな薄い希望は脆くも崩された。王自身の悪魔の姿によって。

力を使い果たしたのか、動けないドゥージを怪物となったセラミスは何度も踏みつけた。

同時にオキュラスの横を走りぬく者。

エグリアースだった。
「エグリアースさん？」
オキュラスも慌てて後に続く。
「まさかエグリアースさん、あいつらを助けるつもりじゃぁ」
オキュラスの問いにエグリアースは答えない。それは、その問いの正解を意味していた。
「なんでっ、あんな奴らを、あいつらは国をこんな状態にした奴らなんですよ」
「・・・・・わかってるさ」
「だったらなんで」
「それでも、俺は、あんな嬲り殺しを見逃すことはできない」
「・・・・っ」
一生傷になることがある。忘れられない恨みもある。許すことは出来ない。
だが。もしかしたら。
いつか。傷が癒える時がくるかもしれない。恨みさえも忘れるかもしれない。許すことが出来るのかもしれない。
それは誰もわからない。本人さえもわからない。何がきっかけでそうなるのかさえも。
けれど。今は。この今だけは。
あの暴挙を。あの邪悪を。あの『昔の』我が王を。
止めることが。倒すことが。全てなのだ。
エグリアースは、難しく、深く考えるのをやめた。
今やるべき、思うべきことを、思うままにやるだけだ。
それは、パール族の命を奪うことではなく、見捨てることではなく、救うことなのだ。
本能が救えと言っている。ならばその本能に従おう。単純なことだ。
「嫌ならくるな」
冷たくエグリアースは言い放った。

オキュラスは軽く舌打ちした。
「そんな言い方ないじゃないですかっ。わかりましたよ。・・・くそっ。わかりましたってば！」
オキュラスは後に続きながら何度も繰り返した。

「くくく・・。気持ちいいのぅ。弱者を踏み潰すのは」
セラミスは蟻を踏むようにドゥージの身体を踏みつけた。踏むたびにドゥージの苦しそうな声が吐き出される。
ドゥージは能力を出す力もない。身体を鉄にする力も、腕を刃に変化させることも、魔法をつかうことも。
ダヴァニータが倒された姿を見て頭に血が上った時点で負けが決定していたのかもしれない。
意識を失いかける中、焦点の合わないぼやけた目の中に2人の兵士が映る。
「ゲルニアの・・・戦士・・か」
エグリアースとオキュラスの2人だった。
「馬鹿な、ムザムザ殺されにきたのか」
言葉にして口に出そうとしたが、声が出ない。ただ見ているしかなかった。
「ほほう、くるか、我が国の兵ども」
セラミスが嬉しそうに言う。後からでも十分に殺せるのか、ドゥージへの執拗な攻撃は一旦止まる。
今になってようやく身体の奥が冷えていくのを感じた。ドゥージは冷静さを取り戻しつつあった。
ドゥージがまずやるべきこと。ステューの安全の確認と逃げ場所を探すこと。
ステューを見る。ピクリとも動かない。息をしているようにも見えない。だが、僅かだがステューの身体が少し動いた。
「生きていたか」

続いてダヴァニータを見る。動かない。ダヴァニータは完全に息絶えていた。
「・・くっ」
悲しんでいる暇はない。ステューだけでもなんとかしなければ。頭はそう思うのだが身体がついてこない。どんなに動かそうと努力してもドゥージは動かす力が残っていないことを悟った。
突如勢いよくステューの身体が引きずられた。ドゥージは驚いて目をこらした。
1人の子供がステューを林の中へ入れようと引きずっている。こんな危険な場所に子供がいる。恐らくはゲルニア国の子供。何の能力もない普通の子供。ステューを安全な場所へと必死で移動させようとしている。
こんな酷いことをした我らを。憎いはずだ。なのに。なぜ助けるのだ。
ドゥージの瞳が涙で滲む。
その男の子供、ボズを見ながら、ドゥージは心の中で「頼む」と呟いた。

「だっ駄目だ」
オキュラスは絶望獣セラミスとの力の差を体感した。どんな攻撃も弾き返される。傷もつけられないのではもうどうすることもできない。
敏捷性もセラミスの方が上だ。セラミスの鋭く太い腕がオキュラスを襲う。
剣で防御をしたが、効かず、オキュラスは飛ばされた。
「ぐああ」
「オキュラス!」
エグリアースがオキュラスを見た。命には別状はなさそうだったが、すぐには動けそうにない。

「くっ」
エグリアースは構えるが、太刀打ち出来ない。それほどまでの恐怖。死を覚悟せざるを得ない。
セラミスの動きが止まる。何かの気配に気づいたのか、唐突に後ろを振り返った。
「！！」
エグリアースは驚愕した。
「あっ」
ボズが、ステューを引っ張っていたのだ。なんとかステューを安全な場所へ隠そうとしていたのだ。
「ボ・ボズ！なんでこんな所に！」
「ほう・・これは、これは」
セラミスはニヤける。
動くこともできないドゥージは絶望的な表情をしていた。
エグリアースは叫びながら斬りかかる。だが、傷がつくことなど皆無に等しい。
「逃げるんだ！」
「だ・だってこいつ・・このままだと」
「いいから逃げろ！」
叫び続けるエグリアースにセラミスの蹴りがはいった。
「がふっ」
「うるさいぞ、ゴミめ」
エグリアースはその場に倒れこんだ。
「エグリアースさん！」
ボズが泣きそうな声を出す。
「くっくっく。残念だったのう」
「うう・・お前なんか・・王様じゃない！」
「いや、我は王だ。このゲルニア国のな」
ボズは歯を食いしばり、精一杯に叫んだ。

「お前が王様の国なんて！そんな国いるもんかぁ！」
ギシャガアアアアアア。
ボズの叫びと同時に絶望獣ハミルの断末魔のような声があがった。
セラミスが咄嗟に見る。
絶望獣ハミルの身体は真っ二つになっていた。
「・・・っ。なんだと・・。ハミル！」
断末魔のようなではなく、まさに断末魔の叫びだった。
屍となったハミルの横で悠々と大剣を片手に佇んでいるハッシュがいた。
「ハッシュさん！」
希望に満ちたボズの声。
「貴様・・・一体」
「俺は、アーガス国の戦士、ハッシュ。伝説剣士クラシェイカの弟子だ。ファミリストンを仲間にするため、悪しき呪縛であるセラミス王を討ちにこの場所へきた」
「クラ・・シェイカだと？」
「そして・・・俺は・・」
ハッシュは大きく息を吸い、確固たる決意を含め、島中に響く声で高らかに言った。
「英雄だ！」

つづく。

「…なにを叫んでいるんだ。あいつは」
ようやく、頂上へ辿り着きそうな距離まで歩いてこれたファミリストンは、響いてきたハッシュの大きな声に独り言をいった。
エグリアースやオキュラスは無事だろうか。パール族は。セラミス王は。心配事が束になって駆け巡る。
とにかく頂上までへと、ファミリストンは脚を進めた。

「伝説の剣士クラシェイカか。そうかお前はその弟子か」
セラミスが意外そうに言った。
弟子をとらないことで昔から有名だったクラシェイカが今になってようやく弟子をとる。そのことがどういうことか。ハッシュの潜在能力がどれだけの力を秘めているのか容易に理解できる。
かつて剣のアーガス国にクラシェイカありとまで言われた剣士。国の窮地を何度も救った英雄。その伝説のクラシェイカに認められるのは偉大なことなのだ。
一筋縄ではいかない。セラミスは思う。いとも簡単に自分が倒されるかもしれない。不安までが脳裏を過ぎる。それくらいクラシェイカの名前はバロゲニアガルドの世界に轟いている。
ハッシュの力を改める必要はない。あの絶望獣ハミルが一刀両断されたことが揺るぎない事実。実力は本物だ。
ハッシュはセラミスに向かって歩き出した。
セラミスは身構える。最も自信のある攻撃を、最大の攻撃を繰り出そうとしている。小細工の様子見などは必要ない。一撃で倒せる攻撃で挑まないと倒すことができない。セラミスは腕に力を込める。更に魔法を腕にかよわせる。これで威力は倍になった。
ハッシュの足は止まらず、間合いがどんどん縮まっていった。迷

いのない足。大剣を片手に向かってくる。

セラミスの緊張は高まる。外れたら、それは死を意味する。失敗は許されない。

あと少し。あともう少しで攻撃可能な位置だ。

唯一、セラミスが勝っていた部分。絶望獣となったセラミスの腕とハッシュの大剣では、僅かにセラミスの腕の長さが勝っていた。

ハッシュの踏み込みよりも早く仕掛けることが出来る。

ザンッ。

ハッシュの身体がセラミスの射程距離に入った。

今だ。

絶望獣セラミスの大きく太い腕が魔法の勢いに乗って繰り出された。ハッシュ目掛けて襲い掛かる。ハッシュがこの攻撃を気づかないはずはない。それを見越しての攻撃。ハッシュの予想を反して、きっと深手を負わせることができるだろうとセラミスは思った。

だが。

セラミスのその思いは簡単に破綻する。

ハッシュは全く動じることなくセラミスの攻撃をあっさりと剣で受け止めた。

セラミスは悟る。いくら大いなる力を手に入れようと、平和な国での暮らしと、実戦も訓練もなく、ただ実験だけに没頭する。それだけでは真の強さなどは得ることができない。日々の信念と努力で培った力こそが本当の強さなのだ。

ハッシュの白き髪が軽く揺れ、セラミスを見つめる瞳が光る。

危険を察知したセラミスは身を翻したが、一瞬遅かった。

勢いよく振り下ろされた大きな剣が、セラミスの強靭な身体を斬り裂いた。

「ぐぎゃあああああ！」

セラミスの悲鳴が木霊する。

「や、やった」
必死で起き上がろうとするオキュラスはその光景を見て言った。
「エグリアースさん、あいつ、やりやがった」
オキュラスはエグリアースを振り返る。
「…ああ」
その瞬間をエグリアースは見ていない。だが、感覚でわかるのだろう。笑みを見せていた。

「ついに」
ドゥージは悲鳴をあげるセラミスを見て心躍った。
念願だったセラミスの死。それがついに目の前に。
もはや「パール族の手で」ということはどうでもよくなっていた。
誰でもいい、あの悪魔を、地獄へ落とすことができるのであれば。
一族の仇。今ここに果たしたことを先祖へ報告する。白き髪の英雄によって。
ステューを見る。ボズがしっかりと抱きかかえ守っていた。
ドゥージは僅かに口元を緩めた。
そして、ゆっくりと目を閉じた。
２度と開かれることのない目を。

「我は王ぞ！絶対的なる、栄光的なる、永遠の王ぞ！」
絶望獣セラミスは叫び、なんとか逃げようと、その場から飛んだ。
だが傷を負ったその身体は大して進むことも許されず、失速して落ちた。
「我は生きなければ、生きなければ」
それでも離れようともがき始めた。
セラミスの前に足が見えた。思わず見上げる。
「おおっ！来てくれたのか、我が従順なる将軍、ファミリストンよ

！」
「王…」
セラミスの目の前にいた者は、ようやく頂上に辿り着いたファミリストンだった。
「ファミリストン将軍！」
オキュラスが遠くから言った。
「さあ、ファミリストン、我を助けろ。あやつらを倒すのじゃ」
セラミスはハッシュ達を指差しながら、ファミリストンの足にすがり付いた。
ファミリストンは微動だにせず、そのセラミスの姿を見ていた。何を思っているのだろうか。人間を捨て、変わり果てた獣の姿。父のように尊敬する王だったはずが、生きるために利用できるものは全て利用するという誇りも何もかもを捨てきった執着。ファミリストンの手が微かに震えていた。
ハッシュは構えを解き、大剣を背中に戻した。もう後はファミリストンに任せるという意思表示だった。
「何をしておる、ファミリストン！はやく！はやくせんかぁ！」
セラミスの声はもっと大きく、ファミリストンの脳裏に達する。
ファミリストンはゆっくりと剣を抜いた。
「なっ！将軍！」
驚くのはオキュラス。まさか、王を守るために自分達と戦うつもりなのだろうか。
「そうだ、それでよい」
セラミスは不敵に笑った。
ハッシュはセラミスに背を向け、ボズの方へと歩き出した。
「むっ、逃げる気か。そうはいかんぞ。さあいけ！ファミリストンよ」
セラミスはハッシュを指差して言った。
ファミリストンは剣を振り上げた。
セラミスの方へ。

「な、な、な。ファミリストン？何をしておる」
「王よ。我が主『だった』王よ。次に生まれ変わる時は、憎しみのない世に生まれて下さい」
「ファ、ファ、ファ」
剣を振り下ろした。
「ファミリスト〜ン！！！！」
剣はセラミスの頭部へ下ろされた。
鮮血が舞う。
セラミスは、ファミリストンの足にしがみ付いたまま、絶命した。
ゲルニア国に滅亡を知らせる風が静かに吹いた。

つづく

第1部　第5章　その国、静かに滅びる　その5

「終わったな」
ハッシュがファミリストンに話しかけた。
「…」
沈黙。ファミリストンは喋らない。
仕方ないとはいえ、長年仕えてきた自分の主を手にかけた。精神的ショックは隠せないだろう。
ハッシュはそれでもあえてファミリストンに言わないといけない。
「一緒にアーガス国へきてくれないか」
絶望神が世に蘇る。世界を守るための戦士が必要だ。師クラシェイカにその命を受けたハッシュはファミリストンをその戦士の1人と判断したのだ。
まずは、師クラシェイカの元へ連れて戻らねばならない。
「行きましょう、将軍」
オキュラスが言った。
「ここにいても、もう意味がないです。世界を見に、そして救うために行きましょう」
「…なんだ、お前も付いてくる気なのか？」
ファミリストンがふっと笑った。
「え？駄目なんですか？」
「いや…いい。行こう。アーガス国へ」
ファミリストンはハッシュに向き直る。
「ハッシュ、世話になる。俺とエグリアース、オキュラス。そして…」
「僕達もだよ！」
遠くから子供の声。
ステューを抱えていたボズだった。後ろから怯えたようにアリシエが現われた。

「…子供達も頼む」
それに待ったをかけたのはオキュラスだった。不満はボスやアリシェにではなく、パール族のステューにだった。
「だけどですね、将軍。こいつらは俺達の仲間を…」
「わかってる」
「だったらなんで…！」
憤慨するオキュラスをエグリアースが止めた。
「あいつも1人だ。あそこにいる兄と姉はもう死んでいるからな。気に入らないのはわかる。だがこの場で見捨てることもできない。そうだろう？」
「くっ…」
オキュラスは悔しそうに唇を噛み締めた。
「わかりました。でも、仲間じゃない！あくまでも捕虜ですからねっ！」
そういってオキュラスは皆から少し離れた。頭を冷やすつもりなのだ。

それから、ハッシュ達はセラミス、ハミル、ダヴァニータ、ドゥージの墓を立てた。
町まで下りていき、亡き兵と町人、各村に残された亡骸を手厚く葬った。
ボズやアリシェには任すことはできないため、残った4人で動いた。2日間かかることになった。
その間、ステューが目を覚ましたが、ドゥージとダヴァニータの死を聞くと貝のように口を閉ざした。まるでアリシェがもう1人増えたようだった。
一通りの準備ができると、今度は国の持ち物であった船で、本島へと出発するように計画した。
ゲルニア国を離れる。故郷を離れる。ファミリストン、エグリアース、オキュラス、ボズ、アリシェの心情は如何なるものであろう

か。
あと何ヶ月か経てば世界ガルド会議が開催される。その準備などの連絡がとれないことを各国が不審に思い、そこでゲルニア国の滅亡が露見するであろう。この出来事は明らかに大問題へと発展する。

ガルド暦９１０年。

ゲルニア国。滅亡。

運命は回る。
蘇りし、絶望神。蘇りし、太陽神。
絶望神滅ぼす英雄達。太陽神守る英雄達。
英雄揃う時。歯車が噛み合う時。
希望を絶望に。絶望を希望に。
近し未来に起こりうる聖戦を前に。
世界はただ静かに眠る。
一時の安らぎに酔いしれて。

~第５章　その国、静かに滅びる　終

第1部　遥か遠き孤島の叫び　エピローグ　黒衣の者

アーガス国。

活気に溢れる市場では笑い声や怒鳴り声が飛び交っている。

人々の間に挟まれながら、目的である酒を買い、家路につこうとしている老人がいた。

ようやく喧騒から逃れ、薄暗い路地で一息ついたところだった。

その老人、元は剣の達人、元はアーガス国伝説の剣士、クラシェイカ。

伝説と呼ばれながらも、その話は若かりし頃の話であって、実際のクラシェイカの姿などは僅かな人間しか知らない。

市場のような何百人もの人がいる中で、元英雄的剣士を見つけることなどは不可能に近い。

クラシェイカ本人もいちいち騒がれるのは苦手だったため、今の状態は悪いとは思っていない。

持病になってしまった腰をさすりながら、クラシェイカは家に着いた。

扉に手をかけようとしたが、止まる。

家の中に気配を感じたからだ。この気配は弟子のハッシュではない。初めて感じる気配。不思議な気配。善でもなく悪でもない読み取れない気配だった。

警戒しながら扉を開けると、頭まで黒い衣を纏った人間がいた。殺気は感じられない。

「何者じゃ」

クラシェイカの問いかけに、黒衣の者は身体を震わせて、頭のかぶりをとった。

そこには見惚れるほどの美しさを醸し出して、更には整った顔立ちの少年だった。

黒衣の少年は深々と頭を下げた。

「勝手に入ってしまって…すみません」
その少し高い声がますます美しい容姿と重なった。
クラシェイカはどこにも行かず、自分の家に来たこの黒衣の少年に対して、真っ先に感じた。
「名はなんという」
クラシェイカの質問に少年は頷いて。
「…ルシアと言います」
少年、ルシアの瞳をクラシェイカはじっと見つめた。思いはやがて確信と変わり、静かに呟いた。
「…太陽神」

〜第1部　遥か遠き孤島の叫び　終　　第2部へ続く。〜

第4回　こぼれ話

皆さんいつも読んでくれてありがとうございます。
読んでない人も来てくれてありがとうございます。

ついに最初も最初の第1部が終了しました。
長かったです。とても長かったです。

いかがだったでしょうか。
かなり未熟なところが自分なりに判明しました。

登場人物の詳しい容姿ですよね。
戦闘シーンの圧倒的なボキャブラリーのなさのためのワンパターンな文章。
設定を簡単に覆すためにその場しのぎでの辻褄合わせで支離滅裂な展開。
今、考えると、いつの間にかパール族が悪者じゃなくなっているのはどうかと思いながら。
僕の中ではドンデン返しのつもりだったのですけど、ドンデンどころではない感じになってしまいました。
こんなことは、これからもよくあると思います。最低なパターンはないようにしますので長い目で見てください。

主人公の正体を明かします。
プロローグとエピローグで出てきた、黒衣の者、黒衣の少年、ルシア。
彼が主人公です。
ハッシュだと思っていた人にはすみませんでした。ハッシュは脇

役です。でも、最高の脇役です。
しかし、ルシアが活躍するのは、まだまだ先です。
少しずつ謎を解きながら進ませていきます。
最後の台詞「太陽神」も気になりますしね？…ね？…ね？

僕のお気に入りであるドゥージが亡くなりました。
パール族のステューをこれから物語に絡ませるために、どうしても、あの２人の兄姉の死は必要だったのです。
ドゥージを死なせる予定ではなかったし、むしろエグリアースが死んでしまう予定だったのですが、結果入れ替わってしまったのです。

さて。
第２部ですが。
話の中心は「ガルド会議」です。
各国が集ってくるこの会議で、滅亡したゲルニア国を巡り、世界のバランスが崩れ始めます。
各国の思惑と蘇る絶望の神の恐怖と、そしてまだ見ぬ英雄達。
この先の話が続いていくための非常に重要な部分になります。

更には、会議の話が中心となるので、国の紹介も含めて、戦闘シーンは限りなく少ないと思います。
話全てをとおして見ても、一番ダルくなる所かもしれませんが、頑張ってついてきてください。
それと、登場人物がかなり出てきます。
全部の国が集るのですから、絶対に覚えれないくらい出てきます。
もしかしたら・・・英雄も・・・？

そこもなんとか工夫をこらしながら書いていこうと思っていますので、よろしくです。

それでは、第2部まで少しの間、充電期間を頂きまして。

見事復活しますので、お待ち下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7805a/

七英雄物語

2010年10月8日14時11分発行